

歓迎すべき夢をありがとう

琥珀兎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

芸能プロダクション765プロは新たな試みに挑戦した。

自社のライブシアターを建て、所属アイドルを大幅に増やしての新たなアイドル事業を立ち上げる。

経験の浅い新人アイドルの集う彼女たちの為の眩いステージ。

三十七人のアイドルたちが百万の輝きを放つ偶像に成らんが為に、一人の男が再び765プロへと舞い戻る。

不器用で愚直な彼とアイドルたちが出会う時、忘れられないステージの幕が上がる。

目次

第一話：彼女たちと彼	1
第二話：誰もいない誰かに戻る	33
第三話：売り物であるということ	63

第一話：彼女たちと彼

都心の一角にある小規模なビルを、傾いた夕日が照らす。

一階に店を構える定食屋が入口にぶら提げた提灯の明かりを点けた。この時間から居酒屋としての営業も始めるといふ店主からの無言の知らせだ。

『お食事処たるき亭』それがこの店の名前。

豊富なメニューと財布に優しいリーズナブルな値段に、確かな味を持つこの店は周辺で働く人たちに重宝されている為、近所でも人気の店である。その店先に、一人の男が今まさに暖簾を潜らんとしていた。

通い慣れた様子で引き戸を開けた男性は見知った店員に笑顔で挨拶をすると、既に他のお客が座る四人掛けの席に、相對するようになって座った。

「すまない、待たせたようだね」

正面に座るお客とは約束があつたらしく、彼は付き合ひの長さが感じられる軽い調子でそう言うと言身近で良く聞く声とそっくりな女性店員を手招きした。

「少し早すぎるかもしれないが、ビールを一本くれないか。勿論、グラスは二つで頼む」

「おいおい、これから仕事があるのか僕に聞かないのか?」

「ないからこそ付き合ってくれたんだろう」

確信を持つてそう告げた彼は注文を受けて席から離れる店員の背中を見送り、改めて待ち合わせていた男性を正視する。

「それで善澤くん、頼んでいた件だが……どうだったかね?」

あまり公にしたいくないのか、彼の声はそれまでよりも一段小さくなっていた。

善澤と呼ばれた壮年の男性は、被つたままのトレードマークのハンチング帽に手を当てた。芳しくなさそうな面持ちは、彼を一瞬だけ不安にさせた。

「見つかるには見つかったよ。やはり、お前が思っていた通り小さな

BARを営んでいた」

「そうか、見つかったか。しかしそれなら何故、そんな顔をするんだね」

「実際に会って話をしたわけではないが、遠目に見てお前の頼みを受け入れてはくれそうにないと思ってるね。……彼はきつと、会つても迎えるが訪れはしないだろう」

私見だがね、と一笑しながら先程男が注文したビールの栓を抜いた。

グラスにビールを注ぐ善澤を眺めながら男は考える。

これが素人の意見ならば彼も大丈夫だろうという楽観的な心持ちを懐けただろう。しかし、善澤が相手ではそうも思えない。芸能記者を生業とする彼はその職業柄、人を見る目に関して確かだ。だからこそ、きつと言う通りなのかもしれない。だが――。

「だとしても、私は彼に会わなくてはならない。今の765プロには彼の力がどうしても必要なのだ」

透明なグラスの中で粟立つ液体はまさに今の彼の状況そのものだ。液体という規模は増え続けるが、それよりも大切な何かが気泡となつては弾け失っていく。

「お前の言う通り、今や765プロもかつての弱小を脱し、所属アイドルだけではなく彼女らの為の舞台を作る側の人間も試される時期にある。

十三人という数のアイドルを二人で回していただけでも精一杯だったのに、シアター部門のアイドルまで居る。完全に人手不足なのに、どうして今それを立ち上げた？」

彼――765プロ社長の高木順二郎には耳が痛い話であった。

善澤が言っていることは紛れも無く、反論の余地も無い正論だ。確かに今の765プロは人手不足。アイドルをプロデュースするプロデューサーが二人に事務員が一人と、かつての弱小時代のまま人員は変わっていない。しかもマネージャーも居ない為、二人のプロデューサーが送り迎えをするが、それも限界がある。手の届かないアイドルたちは各々が自分で現場まで向かう事も、もはや日常茶飯事である。

綱渡りにしても足元の綱があまりにも頼りなさすぎるこの状況で、更に追い打ちをかけるように所属アイドルは増えた。

運転資金の増えた765プロはそれを使って、小規模ながらも自社のライブシアターを建てた。

少なくとも千人以上は収容可能なシアターでは、そこを拠点として活動する新人アイドルが大勢所属している。

その数、実に三十七人。

なのにプロデューサー兼マネージャーの業務を担当するのはたった二人。高木も手の空いている時は率先してアイドルの面倒を見てはいるが、それも時間の問題。沸騰した熱湯に水を注ぎ続けようと根本の解決にはならない。

「だからこそだよ。私の見立てが間違いでなければ、彼が……彼だけがシアターの娘たちを導ける。その為ならいくらでも頭を下げよう」「覚悟はあるようだな……わかった、今夜にでも彼の店に行こう」

「助かるよ」

黄金色の液体が満たされたグラスを高木の前に置き、善澤は微笑む。

「なに、気にするな。僕としても、彼がこの業界に戻ってくれるのは嬉しい。」

「さあ、辛気臭い話は終わりにして乾杯しようじゃないか」

「ああ、そうしよう」

「両者共にグラスを持って掲げる。」

「若者たちの今後を祈って——」

善澤が、高木が持つグラスがぶつかり合う。

お客の増え始めたたるき亭に、清涼な響きが小さく鳴った。

※

月末の定例ライブを終えてから二日。

765ライブシアターでは一日の休暇を経て日常が舞い戻っていた。

「未来ッ、その振り付けワンテンポ遅れてるわよ！」

「ご、ごめん静香ちゃん」

ダンスレッスンを重ねている春日未来の額には玉のような汗が浮かんでは流れ続けている。時折それが目に入っては、染みるのか目を眇めて眉間に皺が出来ている。その度に、今のようにして最上静香が厳しく指摘する。

憧れのアイドルへの第一歩を踏み出したばかりの未来は、レッスンの厳しさを痛感していた。テレビやステージの客席からでは分らない、アイドルの過酷な現実は、容赦なく彼女の身体を痛めつけるが、当の本人に疲労の色は覗えど諦めや苦痛の色は無い。

疲労を振り払うように顔を上げた未来を満足気に見て、静香はコンポの再生スイッチを押そうとした所で一人の少女が意見を述べた。

「静香ー、ちよつと張り切り過ぎじゃない？ ライブが終わってまだ二日なんだし、ちよつとくらいのおんぶりしようよ」

「のんびりなら昨日十分したでしょう。それに、休みが抜けきれないで遅刻した翼に言われたくないわ」

「えへへ、それは途中で美味しそうなクレープが売ってたのがいけないんだよ」

悪びれも無く爛漫な笑顔で答える少女、伊吹翼は未来と同じだけの量のレッスンをこなしているにも拘らず彼女よりも疲労の度合いが少ない。

「えー！ 遅いと思ったらクレープ食べたの!? いいなあ、私も食べたい」

「もう翼っ、未来が真似するからやめなさい」

眉を顰めて言い聞かせる静香はまるでお母さんの様だと思いがながら、未来はこみ上げる笑いを抑えたが、

「未来、何がおかしいの？」

「あつ……でへへへ」

抑えたつもりになっていただけらしい。

「静香って、お母さんみたいだね」

翼の何気ない一言は、まさに未来が懐いたものと同一の意見だっ

た。

静香の眉間に縦皺が生まれたと同時に未来が噴出した。当然、これを黙って見過ごし呆れたような溜息と共に微笑む彼女ではない。

数秒後の彼女の剣幕を見て、宥めよう仲裁に入ろう、などと考える者は少なくともこのレッスン場には居なかった。

静香の雷が落ちてから一時間後、滞りはしたもののレッスンそのものは順調に消化し、一同は談話室兼事務所へと集まり憩いの時を各々が過ごしていた。

中央の長テーブルの席に着く者、壁際のソファーに深く座る者、キッチンに立ち一心不乱に料理をする者や事務所の作業机付近のスペースを陣取り黙々と携帯ゲームをする者まで、さまざまな人がいる。

男性は一人も居ない。ここに居るのは全員が女性であり、かつアイドルの者たちのみ。

ライブシアターには合計三十七人のアイドルが所属しており、地方からやってきた者はシアター内に併設された寮で生活をしている。それ故に談話室兼事務所には冷蔵庫やキッチンが設置されており、他の場所には浴室や洗濯室などの設備も用意されている。

寮に住む者らはここで生活し、このステージで仕事……つまりはライブを行ったりしている。

アイドルと聞けば他にもラジオ番組やテレビ出演。他にも地方営業やグラビアなどその仕事は多岐に渡るが、どの仕事を重点的に積極的に請けていくかはプロデューサーの手腕も必要となってくる。

しかし――。

「プロデューサーさん、今日は来れないのかな」

「言ったでしょ、今日は別件の仕事で忙しくて来れないって」

長テーブルに突っ伏し溜息混じりに呟く未来を一蹴したのは、抑揚のない声から件のプロデューサーに対しての関心の無さが聞き取れそうな、腰まで伸びたブラウンの髪の子供だった。

「別に、今日はレッスン以外にみんなする事もないし、来ても来なくて

も変わらないわ」

未来の隣、一番隅の席で手に持った本に視線を落としながら言い切ると、再び読書作業に戻ったのか無言のまま視線は動かない。

「でも、なんかプロデューサーさんが来ないと寂しくない？」

「私に同意を求めても、望んだ答えなんか返ってこないからね。私は、一人でも大丈夫だから」

「ええーでもプロデューサーさんが来てくれないと、他のお仕事の話とかも出来ないよ」

現状、彼女たちはレッスンと定例ライブを繰り返し、その内の数人が時折プロデューサーが取ってくる仕事を請けるというサイクルになっている。

765プロ本社に居る十三人のアイドルとは違い、彼女たちシアター組はアイドルとしての経験もキャリアも少ない新人だ。仕事が少ないのは当たり前で、寧ろシアターライブが月に一度定期的に行えるだけでも恵まれているのかもしれない。しかし、それでも不安は残る。

「そもそも、プロデューサーは私たちをプロデュースするつもりがあるのかしら。こうも放っておかれるとやる気を疑いたくなるわ」

焦燥感からついそんな言葉が静香の口から零れ落ちていた。

「仕方ないよ、だって先輩たちだけでも十三人居るのに、劇場はその三倍は居るし。二人だけじゃ全員を見るのも大変だと思うよ」

「どうして増やささないんだろ、わたしたち担当のプロデューサーが居たら面白い仕事とか出来るかもしれないのに」

未来はこのシアターに来て間もないから実感が湧かない為、静香の焦りを理解出来なかった。ただ、翼の意見には同意出来る部分がある。

もし自分たちの担当プロデューサーが居たら、きつとここも一段と活気づくだろう。

自然と未来の視線が部屋の隅へと移る。

事務所としても機能するように——他に部屋が無い為——事務作業を行う為に置いてあるデスクはあまり使い込まれた形跡はなく、ど

こか空虚な調が聞こえてきそうだった。

「そうだね、もしそうなつたら面白くなりそう!」

「出来たら優しい人がいいな、キツイのは嫌だし。あと、男の人だと色々と言見が聞けて良いかも。」

ねえ、未来だつたらどんな人が良い?」

「私? うーん、そうだなあ私だつたら、一人前のアイドルにしてくれらるならどんな人でも良いかな。あ、でもやつぱり面倒見のいい人だと嬉しいな。その方が劇場も賑やかになると思うんだ。」

静香ちゃんは? どう思う?」

「え、わ、私?? プロデューサーとしての腕が良いのは大前提で、頼りがいがある方が、ないよりはマシね」

「頼りがいか、うんうんなんかイメージが浮かんできたっぽい。志保ちゃんは?」

いつの間にかどんなプロデューサーが良いのかという話題に固まり、未来と翼は他のアイドルたちに質問をし始めた。

問いを向けられた志保は手元の本から視線を上げると、一拍だけ上を向き考えるような素振りをした。

「私は基本的に静香の言ったような人で、過度に干渉してこなければ誰でも良いわ」

「ふーん、志保ちゃんも静香もストイックだね。もつと自分の好みとか無いの?」

「翼こそプロデューサーに何を求めているの」

冷静さを見失わない志保はつまらなそうに意見する翼に反論すると、質問には答えたと言わんばかりに再び視線を手元へと落とした。

一見すると冷たい対応をとっているように見えるが、志保に嫌悪や敵意などの感情は無い。ただひたすらに他者への関心が薄いだけで、必要最低限のコミュニケーションに留めているだけなのだ。

そして、それを知っているからこそ翼も他の子たちも彼女の態度に言及するような事はしない。

決して同じシアターの仲間をないがしろにしているわけではないから。

「みんなだっただらどう？　どんなプロデューサーさんが良いと思う？」

未来の一声に各々が自分の中に居るプロデューサー像を描き始める。勿論、765プロには既に二人のプロデューサーが居るが、彼女と顔を合わせる回数はそう多くない為、自然と二人とはかけ離れた像を脳裏に思い浮かべていた。

談話室にはシアター組の全員が居るわけではない。現プロデューサーの取ってきた仕事でいない者や、レッスンを終えて自宅へと帰った者や寮の自室に戻った者も居る。よって、劇場のみんなの意見が集まるわけではないが、それでも大事な意見の一つである事には変わらない。

一緒にゲームに付き合ってくれる人だと良い。自分の作った料理を沢山食べてくれる人だと良い。語っている最中に想像が飛躍し他国の王子へと変貌したり等、彼女たちの意見はまさに十人十色。

思春期の少女という事もあって一度話が盛り上がると、話題が尽きる事は無かった。

その日は珍しく寮に住んでいない人も時間を忘れ、遅くまで談話室に残って姦しい会話を続けていた。

※

夜も深まった時間帯、都心の喧騒とは無縁の閑静とは違い簡素な響きが聞こえる街並みの、とあるビルの中二階にあるBARの看板が胡乱な明滅を繰り返している。

木製の、相對するだけで慣れない者なら重圧さえ感じられる厚みのある扉。外界との繋がりを遮断するかのような隔たりさえ感じさせるそれは、まるで開ける者の覚悟を問うように厳格だ。

扉の内側、店の内部は木製のカウンター席のみでその席数は七つのみ。

見るからに小規模な店内にお客の姿は無く、店主である男性のバーテンダーが一人、他人の目が無いのを良い事に——いや、例えお客が

居ようともそうしたのであろう——煙草を啜えたまま紫煙を濛々と立ち昇らせていた。

本日の入客数は今の所四人。総売り上げは約二万と、客単価的に悪くはなかった。だが、これ以上の入客が無いとなれば事情は変わる。

新しい月が始まって二日。先日の売り上げが今日と同じ二万の為、出来る事なら今夜は四万以上の売り上げが欲しいのが店主としての正直な心情だ。しかし、こちらの都合などお客側からすれば知った事ではない。

来ないのならば仕方ない、今夜はそう言う日なのだろうと断じて受け入れるぐらいの余裕があるらしく、天井に上っていく紫煙に不要なまでの揺らめきは無い。

カウンターの内側、客側からは届かない死角に置いてある値段の張りそうな腕時計を横目に時間を確認する。

「このまま誰も来ないなら、今夜も早めに閉めてどこかに顔を出しに行くか」

これから何処の店で飲もうかと思案し始めた頃——唐突に扉が開いた。

扉の軋む音を耳にして即座に視線がそちらへと向かう。来客は二人。その顔ぶれはなんの冗談か、昔の雇用主とその友人であった。

「突然すまない、まだ店は営業中かね？」

「御覧の通り、客は居ないがその扉が開く限り営業中ですよ——高木さん」

柔和な笑みを携えて現れた高木順二郎は店主のぶつきらぼうな返答に気を良くしたのか、一層笑みを深めると連れと一緒に並んで彼の正面、カウンターの中央に並んで席に着いた。

席に着いたのを確認すると、彼は店主として、バーテンダーとしての仕事に切り替え即座にコースターを二人の前へと置いた。そしてそのまま流れるような動作で背後のタオルウォーマーから二本のおしぼりを取り出し、両手を使って広げ熱を逃がしながら差し出した。

「春に入ったとはいえまだ夜は冷えるでしょう」

「おおつ、ありがたい。日中は暖かくなってきたのに、夜は冷えたから

ね助かるよ。相変わらず君は目端が利くねえ」

「バーテンダーですから。善澤さんにはそれと、こちらですね」

夜風で冷えた手をおしぼりで温める高木の隣に座る善澤にも手渡すと、動作を途切れさせることなく灰皿を前に置く。

高木は煙草を吸わないが、善澤は煙草を吸う。それも常に胸ポケットに常備しているのを知っている彼ならではの事前知識あつての行動……というわけではない。彼はそれを知らなくても察する事が出来た。何故なら善澤からは既に煙草の臭いが発せられていた。それだけでなく、彼がおしぼりを差し出す直前、即ち席に着いた瞬間に懐に手を入れようとしていた。善澤の挙動は、酒をよく嗜む喫煙者に多く見られるものだった。

一杯飲む前、もしくは乾杯を終えたらすぐに煙草を吸えるように、取り出しやすい目の前に置こうとしたのだろう。

現に、彼が灰皿を差し出すと善澤は思い出したように再び懐へと手を伸ばし、ソフトケースの煙草を取り出した。

「僕が煙草を吸う事、覚えていたんだね」

「あつさり忘れるほど、時間は経っていないでしょう。それに忘れるわけありませんよ、お世話になった人の趣向を」

「若者に恩義を感じてもらうのも悪くないもんだ」

善澤は愉快そうに鼻を鳴らすと煙草を啜え火を灯した。店内に二つの狼煙が上がる。

「煙草を吸いながらで失礼、こういったいい加減な店なものですから。ご注文はお決まりで？」

「なに構わないよ、君相手に畏まられてもこつちが困る。あ、私はバーボンをロックで頼む。銘柄は君に任せよう」

「こつちはスコッチにしよう、今夜はブレンデッドで、同じくロックで」

「かしこまりました」

注文を受けて彼は二人に背を向けた。

バックバーに並ぶ酒の品数は決して多くはない。むしろ他の店と比べると少ない方だろう。だからここには彼の好む酒と、常連が好ん

で飲む酒の他に、必要最低限基本の酒を数種並べているだけだ。店内の広さからしても、それが限界なのだ。

毎日磨かれ埃一つない酒のボトルたちから、彼は今に相応しいだろう一本を選ぶ。

逡巡の後、その手が二本のボトルを掴みとった。

クリスタル製のグラスをカウンターに置き、中に丸く切り出された氷を静かに下ろす。すると、そのまますぐに酒を注がずに彼はバースプーンと呼ばれる両端がスプーンとフォークの二種類になっている長物を手にして、グラスへと音を立てずに差し込んだ。

「ほお……君のこういった技術は初めて見るが、随分と洗練されているね。素晴らしい」

「毎日呆れるほどの数を繰り返してますから」

丸氷の表面に付着した霜が溶け出し、僅かに水を滴らせる。

こうして温度を上げる事で、液体が注がれた際の急激な温度差で氷が割れてしまわないようにしているのだ。水に濡れ輝きが増した氷を見て、彼はグラスの底に溜まった水を落とす為、氷が落ちないようにバースプーンで抑えながらグラスの天地を逆転させる。

水を捨て終えたグラスに残るのは、クリスタルの輝きと内包する星のような煌めきを放つ丸氷だけ。

そのそれぞれのグラスに先程選んだ酒を注いでいく。

「お待たせしました」

コースターの上にグラスを置く。

「高木さんには、こちら『オールドグランダッド80』を」

そしてもう一つ。

「善澤さんは『ベイリー・ニコル・ジャーヴィー』というブレンデッドを」

「どうだね、君も一杯飲まないか？ 勿論、支払いは私が持つ」

「ありがとうございます。では頂きます」

適当な安価のウイスキーのソーダ割りを作り、既にグラスを掲げている二人に向かって傾ける。その際、グラスの淵は相手方よりも低い位置に持つて行くのを忘れない。

二人は自身が持つグラスの価値を知っているらしく、乾杯をする際に必要以上の音を立てないよう、ぶつけると言うよりも触れ合わせるように気を使っていた。十分に配慮された乾杯の音は、静謐漂う清らかなものであった。

しばらくの間、三人は他愛ない会話を繰り返していた。店の経営状況や、自分が飲んでる酒についての説明など、明日にはアルコールと共に抜けてしまうような会話を交わしていた。自然と、酒の勢いも増えていく。

「君も二十六歳か、まだあれから二年程しか経過していないのに、十年は経ったような気分だよ」

「それだけ密度が濃い日々だった、という事でしょう。あの毎日は」
だが、善澤の灰皿を交換したタイミングで高木が切り出した言葉に、そんな雰囲気も霧散した。

「どうだね、それならもう一度——あの日々を送ってはみないか？」
それまで酒を片手に談笑していたとは思えない程真剣な眼差しに、言っている事が冗談ではないという真摯な声に、彼の思考が一時停止した。

「突然だというのは重々承知している。虫の良い話をしているのも十分に理解している。」

けれど、それでもどうか……君の力を貸してはくれないか」
「……………」

彼は答えない。

瞼を閉じて煙草に火を点ける。緩慢なその動作は、迷いから生じるのか……それとも呆れか。

口を挿むべきではないと判じているのか、善澤はじりじりと燃える煙草の先を眺めたまま押し黙っている。或いはそれこそが彼の答えであるかのようだ。

「君が765プロを去って二年、あれからアイドルも増え、プロデュースも増えた。覚えているかい彼女を、律子くんが今はアイドル兼プロデューサーとしてアイドルを支えているのだよ。」

だがそれもいずれ限界が来る」

「……それで俺に、何をしろと言うのですか？」

紫煙と共に吐き出される言葉は、固く冷たい。

高木の脳裏に、夕刻に善澤に言われた言葉が蘇る。それでも、彼は諦めるわけにはいかなかった。

「いま私は765ライブシアターなるライブ会場を立ち上げた。そこに所属する新人アイドル、総人数37人のプロデューサーとして働いてはくれないだろうか。」

勿論、給料その他諸々の優遇は出来る限りする」

「37人か……一つ聞いても良いですか？」

高木の口から出た人数は完全に彼の想像の範囲外だった。

どう考えても無茶すぎる。自分がいた頃より人員が増えたとはいえ、それでも完全にキャパシティをオーバーしているのは間違いない。だからこそ、聞かないわけにはいかない。

「どうしてそんな無謀な真似を、今やろうだなんて思ったのです。会社を盤石なものにするなら、シアターなど作らず人員を補強してからアイドルを増やすべきだった。」

アイドルを増やした所で、それを完全にサポートでき売り出す事が出来なければ共倒れです。

それが分からない貴方ではないでしょう」

「アイドルになりたいという夢を叶える。若者がなんの憂いも無く、思うように出来るよう信じる。」

十二人のアイドル諸君とそれを支える者たちが、その形を見せてくれた今だからこそなのだ。未だ燦る少女たちの為の舞台を作らずにはいられなかったのだ」

浪々と語る高木の論は彼も知っていた。それこそ初めて765プロの門をくぐった時から、彼は口癖のようにその夢を語っていた。

悪くないと思った。思っていたのだ彼も……語るだけならば。

「夢物語です。それは語るには美しく、聞かせるには醜い泡沫の夢に過ぎません。」

きつぱりと切り捨てるよう決然と彼は言い切った。

「それでは——」

「ええ、お断りします」

考えるまでもない。高木の話を書く限り、まともな人間ならば受けるわけがないのだ。

37人のアイドルを一人で何とかしてくれなんて、そんな荒唐無稽な誘いに乗るわけがない。ましてや自分は、一度会社を去った人間。その時感じた価値観の相違を拭う事は出来ない。

「俺のような人間は、貴方の会社に必要ではない筈。それは過去の歴史が明確に語る事実です」

「君が自分をどう思っているかが、あの頃から私の考えは変わっていない。……変わらず、私という人間は君を信じているよ」

「何を根拠に……」

一笑に付し彼はグラスを傾ける。

だが高木の顔は何やら確信めいた面持ちをしていた。

「根拠ならある。……現にいま君は、会社の為になる事を考えてアイドルの為にならないと自分を評価し拒否したではないか。」

「それこそ、私が君を信じるに足る要因だ」

「……一般論を言ったままで、他意はありません」

「何だっつかまわないよ。君は私がティンと来た数少ない男なのだから、この評価を改めるつもりはない」

「……っ、くく、はははは」

カラン、と氷が踊り、笑い声をあげたのはそれまで黙って静観していた善澤であった。

肩を唸らせ止まらぬ笑いに卒倒しそうになるのを耐えるよう、上体をカウンターに預けて善澤は暫くの間笑い続けた。それはもう愉快そうに。

「これは勝負あったな、君の負けだよバーテンダー君……いや、元765プロの若きプロデューサー」

「……そもそも、これは勝負の類だったのでしょか」

「違うのかい？ 僕には互いが互いに己が我を通すために、押し問答をしているようにしか見えなかったよ。」

そして君は負けた。この男の最後の言葉に、反論する弁を失っただ

ろう。君ほどではないが、これでも人を見る仕事なんでねそれぐらいの眼力はあるつもりさ」

煙草を持った手でグラスを彼に向かって掲げる善澤は自信に溢れていた。

「まあそれでも、選べるのは他ならぬ君だけだ。今一度、考えてみてはくれないか」

「……………」

言われて思案する彼の前に、高木は一冊のファイルを置いた。

「この中にはいま所属しているアイドルたちのプロフィールが揃っている。既に知っているだろう律子さんと水瀬くんのも、当然入っている。

これを見て、もし思う事があったならシアターへと来てくれたまえ。場所はファイルに同封してある」

分厚いファイルに彼は触れず、眺める事しかしない。

考える時間が欲しいのだろう。そう判じたのか高木は万札を二枚置いて、すっかり重くなつた腰を上げた。

「それじゃあ、今夜はこれぐらいで失礼しよう」

「ああ、またその内飲みに……いや、一緒に飲めることを楽しみにしているよ」

二人の男が席を立ち店を後にしようとする。

店主である彼はそれを見送ろうと視線を上げて、ふと、視界の端に映った二枚の紙幣に気がついた。

「お待ちくださいお客様、これでは支払いが少し多いですが」

「おお、そうだったかね。なら、こういう台詞を言うでしょう——釣りはいらないよ」

「言いたかっただけですな、それ」

「そうとも。大人として、君には不甲斐ない面ばかり見せてしまったからね。最後の足掻きというやつだよ」

朗らかに言い残し、二人は夜の闇に塗りつぶされるよう去って行った。

彼らが去った後の店内にはささやかな酒宴の名残と、一冊のファイ

ルが残されている。

カウンター上を掃除している間も、彼はそのファイルには一切触れなかった。頭の中で考えるのは今夜の売り上げの事。

高木が気前よく多めに支払って行った事により本日の目標には届いた。これで今夜の憂いも無くなり気が楽になった筈だ。

——なのに、彼の胸中は座りが悪く落ち着きがない。

「最後の足掻き……か」

決して自分に向けられた言葉じゃないのは分かっている。なのに彼にはまるで在りもしない泣き所を突かれたように感じてしまった。

今も足掻き続けている高木と、足掻く事を止め安寧と怠惰に肩までつかった自分。

かつてプロデューサーとしての肩書を持っていた過去の姿を夢想する。

「あの人はまた自分から毒を呑むつもりなのか？」

自分の倍はあるだろう年齢の男性にあそこまで言わせたのだ、せめて見るぐらいの事をしなくては筋が通らないだろう。

諦めたようにファイルを手取る。

ページを一枚一枚捲る毎に、一人一人のアイドルの顔写真とプロフィールが広がっていく。その全てに目を皿のようにして読み通す彼の瞳は、かつて芸能界で仕事をしていた頃を彷彿とさせる。

閉店時間にはまだ早い時間だが、今夜はもう閉めよう。

彼は店先の照明を落とすと、扉に鍵をかけて片付けを終えたカウンターへと座った。

見落としないよう注視しながら煙草を啜える。

——作業は夜が明けるまで続いた。

※

都心の一角にある小規模なビルを、中天に上る太陽が照らしている。

見慣れた街並みを眺めつつ道を歩いていると、どこからか櫻の香り

が漂ってきた。

懐かしい櫻の香りは過去を想起させる特急券だ。三年前のあの日、根拠のない全能感と自信を持って歩いた道を、再び彼は辿っている。その一年後には去った道を。

程なくして視界に映ったのは未だに味を覚えている、お食事処たるき亭の看板だった。ということは目的地ももうすぐだ。

店の前を通るとまだ営業時間外らしく、引き戸の扉に準備中と書かれた札が掲げてあった。

通り過ぎてすぐの角、たるき亭の入っているビルを左手に左折し路地へと入る。日の光が差さない小道は変わらず人の影が無い——と思いきや、彼がいた頃ではありえなかった出待ちのファンが数人立っていた。

「……変わったな」

呟き、湧き出る感傷を振り払う。

出待ちのファンの顔ぶれを横目に盗み見ながら年季が入った両開きの扉を開く。アイドル事務所という性質上、普通ならばここでファンの人間に怪しまれるだろうが、彼は前もって関係者と勘違いしてもおかしくないスーツ姿に着替えていた。

案の定、目を眇めて睨む者も数人いたが、何とも思わぬ平静さで無視して入ると咎める者は一人も居なかった。

目的の事務所は上階にある。エレベーターで上がろうかと思いついたボタンを押そうとした所で彼の動きが止まった。今まさに押そうとしていたボタンは、何の反応も感じられなかったのだ。

「シアターを建てる前にエレベーターを修理するのが先だろ」

相変わらずどこか抜けている人だ、と嘆息し諦めて階段を上る。

階段を上り目的の階へとたどり着くと事務所を隔てる扉の前で立ち止まった。扉に付いた磨りガラスには『芸能プロダクション765プロダクション』とプリントされている。

扉の向こう側からはもう既に出社しているアイドルも居るのだろう、楽しいな会話をしている声が聞こえてくる。古巣とはいえ、ここは既に彼の知っている場所ではない。

“なんにせよ、始めが肝心だな”
意識を切り替える。

しっかりとノブを掴み、彼は二年の時を経て再び扉を開いた。

「失礼します」

「あら、申し訳ありませんがどちら様でしょう、アポイントメントは御座いますか？」

事務所に入つての第一声に答えたのは、彼の記憶に残っている事務員の音無小鳥だった。

彼女は覚えていないのか、彼を見て始め怪訝な表情をしたが、手首に光る高価な時計を目にして来客だと思つたのだろう、鈴の音のような声で事務的な返答をしてきた。

「高木社長はいらっしゃいますか？ 昨晚の返答をしに来たと言えば、わかると思います」

「はあ……ではただいま呼んできますので、こちらの席に掛けてお待ちください」

「お願いします」

小鳥に案内され奥のパーテーションで仕切られた客席に通される。途中、給湯室やテレビが置かれたソファ席にはファイルで見た顔ぶれが好奇心の眼差しを向けてきたが、それら全てに彼は見向きもしなかつた。

「あ、あの、よ、よろしければどうぞ……粗茶ですが」

「ありがとうございます」

客席のソファに腰を下ろし数分、怯えた様子でお茶を淹れてきた少女に礼を言い口をつける。

茶をよく知っているのか、彼女が淹れたお茶は彼の舌に絶妙にマッチした。現職の性ゆえか、差し出された飲み物は吟味するようになっていた。

「良い茶葉を使っている。それに、湯の温度も適温。いい腕をしている」

「ふえつ、え、えつと……ありがとうございます」

適切な評価を下した彼の声を聞いて、少女は赤面した顔をお盆で隠

すと脱兎の如くその場を後にした。

入れ替わるように小鳥が姿を見せた。その顔は先ほどの営業用の顔ではなく、見知った人に向ける幼さを感じさせるような苦笑이었다。

「お待たせしました。ごめんなさい、まさか君だったなんて……忘れちゃうなんてあたしったら駄目ね」

「いいえ、それも仕方ありません。小鳥さんが悪いわけではないので。改めまして、お久しぶりです」

「ええ、本当に久しぶり。もう二年になるのかしら。随分顔つきが大人になって、見違いちゃったわ」

「そうですね、丁度二年程かと」

そろそろ貴女の歳も三十なのでは、という言葉は余計だろうと分かりきった考えを捨て立ち上がる。

「それで、高木社長は？」

「そうだったわ、ついて来て。社長室に案内するわ」

肩を竦ませ微笑む小鳥の後を追い社長室へと入る。給湯室のパイプから隠れるように先程の少女が顔を覗かせているが、彼は気がつかないふりをした。

「社長、ご案内しました」

社長室に入って最初に感じたのは変わらない、という感慨だった。

奥のデスクの向こう、ブラインドの掛かった窓の前に背を向けて立つ高木の顔は、こちらからではよく見えない。

「ご苦勞、音無くん。ではすまないが席を外してもらっても良いかね」

「わかりました、では失礼します」

そう言っつて小鳥が部屋から退出した。

残されたのは彼と高木の男二人だけ。この事務所内に現在いる数少ない男性が一つの部屋に集まっていた。

なにかから言うべきか、と彼が思案していると、高木がこちらに振り返って先んじた。

「ここに来てくれた、という事は……私は喜んで良いのだろうか？」
「単にファイルを返しに来ただけ、とは思わないのですか？」

つまらない芝居を見たかのように、高木は愉快そうに鼻を鳴らした。

「返しに来ただけの人間が、そんな高価な装いをしてくるかね？ 見たところ、君の腕にある時計は結構な額のものだと思うのだが」

「……気づいていましたか」

ふっ、と一息吐き指摘された腕時計が良く見えるよう腕を上げる。手首にはBARで時間を見る為にカウンターの中に置いていた腕時計が嵌っていた。

「初対面にはある程度のハツタリが必要になる。昔、そう君はよく言っていたからね」

「よく覚えておいで」

「これでも芸能プロダクションの社長なのでね」

冗談交じりに言いきって、それを合図に二人は笑い合う。悪戯の成功した悪童のように、夏の太陽の元、半袖半ズボンで駆けまわる子供のように。

しばらく笑い合った後、高木が笑い過ぎて目尻に浮かんだ涙を拭き、経営者としての顔を上げた。

「ありがとう、よく戻ってきてくれた。私たちは君を歓迎しよう——プロデューサー」

「店は当分の間、閉めることになりますね。」

分かっているでしょうが、俺のやり方は反感を買いかねます。それでも良ければ、よろしくお願いします」

「言っただろう、君の力が必要だと。なに、私は君を信じている」

高木社長が右手を差し出す。

意図する意味を察して彼——プロデューサーも右手を差し出して握った。

「では早速ですまないが、アイドル諸君に紹介がてらの挨拶をしてもraithたいんだが、いいかね？」

「当然です、請けた以上貴方は俺の雇用主。それに逆らうだけの理由も意味ありません。」

どうせ社長の事ですから、もう準備は終わっているのでしょうか？」

「流石だ。その通り、アイドルとプロデューサー諸君には既に全員集まるよう通達済みだ。無論、君の事は内密にしたまま。」

まずはこの事務所に集まる十三人のアイドルと二人のプロデューサー、それともう済んだだろうが一応事務員の音無くんにも」

社長室の扉を開け、先を行く高木社長の後ろについて事務所でも中央に位置するホワイトボードの前に立つ。彼と高木社長の周囲には既に小鳥から話を聞いていたのだろう、アイドルたちと男性プロデューサーの姿があった。

自己紹介に抵抗はないのだが、一つ彼には懸念事項があった。それは高木社長も知つてのことだが、あえて無視しているのだろう。これを取り越えなければ先は無いのだと暗に言っているのかもしれない。約一名の敵意の眼差しを受け流しながら、隣で高木社長が合図代わりの堰をした。

「ウオホン！ それではプロデューサー並びにアイドル諸君。諸君らに新たな765プロの仲間となるプロデューサーを紹介しよう！」

君っ、頼むよ」

賽は投げられた。これより先、自分が気を抜く事は少なくなるだろう。

一歩前に出て全員の顔を見渡す。小鳥と律子、そしてあと一人を除いた面々の顔は総じて似たように驚愕と期待が絢交ぜになった色に満ちている。

下腹部に心持ち力を籠めて、口を開く。張るようではなく、よく通る様にイメージして。

「初めまして。この度、新たに765プロに入社したプロデューサーだ。」

既に知っている者も居るが、俺は二年前までこの事務所に居た人間だ、それを隠すつもりはない。一身上の都合により一度は退社した身ではあるが、戻ってきた以上、中途半端に終わらせるつもりはない。

ちなみに、担当はシアター部門になるので、君らとの直接的な交流は少なくなるだろうがよろしく頼む」

「……ッ!? やっぱリアンター！」

「今この場での私語は認めない。少なくとも、プロを自負するのなら……その意味ぐらい分かるだろう」

「くくくッ！」

厳然とした姿勢で言い放ち、眦を上げる少女を封殺する。

「質問があれば後日受けよう、今日の所は音無さんもしくは秋月か……その感情制御の出来ない水瀬に訊いてくれ。以上」

早々に噛みついてきた少女——水瀬伊織の剣呑な横槍によって一気に雰囲気重くなった事務所にて、用は済んだとばかりに視線を外し入口へと向かって歩き出した。

当惑の視線を受け、背後でフォローする社長の声を耳にしながら事務所から出て行った。

扉を出てすぐ、上へと続く階段の途中で彼が待つこと数分。扉の軋む音と共に高木社長が出てきた。

「分かっていた事とはいえ、時間が掛かりそうだ」

「早まったと思つてます？」

「まさか、それほど愚かではないさ」

扉の向こうから痼癩を起こす甲高い声が聞こえ、彼は呆れたように溜息を漏らした。

「水瀬はまだ意地を張っているのか」

「それが、彼女の長所でもある。こればかりは君にも受け入れてもらいたい」

「まあ、今はいいです。とりあえず、シアターへと向かいましょう。時間惜しい」

「わかった、行こうか」

地階へと降り、高木社長の案内で駐車場へと向かう。

駐車場には三台の車があり、内二台は社用車。残りの一台はもう一人の男性プロデューサーの所有する車だと説明を聞きながら、彼は車の鍵を渡された。

五人乗りの乗用車の鍵を開け、運転席に乗り込む。

「場所はわかるかね？」

「当然です、渡された資料は全て読みましたので」

イグニツションキーを回しエンジンをかける。
助手席に高木社長が乗り、シートベルトを締めたのを確認するとサイドブレーキを降ろして出発した。

※

夜まで続いた姦しい団欒から明けて翌日、少女たちシアター組は事務所兼談話室に備え付けられた電話で小鳥からの伝言を聞き、全員がシアターの舞台へと集まっていた。

「こうしてステージに全員が集まると、なんだかスゴイって感じだね！」

「ホントホント、このままみんなでライブのリハでもやつちやう？」

無邪気にはしゃぐ未来に、見るからに今時の女子高生然とした少女、所恵美が同意してさらに話を大きくする。

流行を常に見逃さない彼女の服装は、雑誌等で紹介されている服にお気に入りの香水を付けており、街を歩けば数人に声をかけられるのは必至の装いだ。

「でも突然なんだろう『全員シアターのステージに集合』って、何か重要な発表でもあるのかな？」

「むむ、読めましたよのり子ちゃん！ ありさにはこの先の展開が見えますっ。きつとこれからアイドルちゃん達のアイドルちゃん達によるアイドルちゃん達の為の——」

「何や突拍子もへん事いってんの亜利沙。……って、ちよいちよい！」

口元拭かへんって涎っ」

「ムフフ……アイドルちゃん達みんな可愛いのです……」

「あかん、完全に飛んでるやん」

幸せな妄想を脳内に展開する松田亜利沙に呆れながらツツコミを入れる横山奈緒は、彼女の口元を見てこれはファンには見せられない、と慌てて指摘をした。

のり子の疑問は亜利沙の暴走によって逸らされ奈緒には届かなかったが、少し離れた所で挑発的な服装を身に纏った女性が唸るよう

に首を傾げていた。

「発表ねえ、のり子ちゃんの言うとおりちよーつと気になるわね」

今までになかった事例に百瀬莉緒もまた思案する。

二十三歳という年齢でシアターでも年長組に位置する彼女は、少女たちの樂觀的な発言に表面上は同調しつつ冷静的に考える側に居る。

これが喜ばしい発表なら良い。確かにどんななサプライズが待っているのかと心が躍るのも湧けないだろう。しかし、現実は何も嬉しい事だけじゃないのを彼女は知っている。だからこそ、彼女はそういった可能性もあるのではないかと考える。

とはいえ、

「考えた所でわかるわけないわよねっ」

それが長続きするような性格ではなかった。

全員が集まってから数分後。会話に花が咲き始めた頃に、なんの前触れもなくシアターの扉が開いた。

両開きの一見豪華に見えるが、実はそれほど予算のかかっていない大扉の開く音に、アイドル全員が気がつき振り返った。

一階席の最奥、中央の開いた大扉に立っているのは二人の男性だ。

一人は思い出そうと考えるまでもない。言うまでもなく彼女らの所属する事務所の社長なのだから。しかし、その隣に立つ男性には誰も見覚えが無かった。

一般男性の平均身長を下回る——見たところ約百六十cm位——その男性は、黒々とした髪をオールバックにして、眠たげなのか睨んでいるのか判別のつかない眼差しでアイドルたちを注視している。遠慮のない視線は、しかしどこか嫌な気分にはならなかった。

「待たせたねアイドル諸君！ もうみんな揃っているかね？」

「はいっ！」

大仰に語る高木社長に、彼女たちは声をそろえて返事をした。条件反射の域で息の揃った反応に、隣の男性の眉根が僅かに寄つたのを、遠くに立つ彼女らは気がつかなかった。

「うんうん、元気そうで何よりだ」

満足気に高木社長が頷き、二人は一步一步踏みしめるようにシア

ターの階段を降りてステージへと近づいて行く。

アイドルたちはまさか社長自らが訪れるとは思ってもみなかったのか、どこか落ち着きがないが彼らにはそんな事情は関係ない。

客席の最前列までたどり着いた二人は、そこで足を止めてステージに立つ原石たちを見上げる。

何人かがそこで社長の元へと行く所か、見下ろしているという現状にハツとなり慌てて降りようとするが、

「ああそのままそのまま、君たちはステージに立っていて構わないよ。私も、諸君らのステージに立つ姿はなるべく多く見ておきたいのでね」

とやんわりとした制止に足が止まった。

隣の男性は、相変わらず視線をアイドルたちの間を行ったり来たりさせたまま、一言も言葉を発さない。

「あの、それで社長。今日はどのような案件でここに？」

アイドルたちの代表として一歩前に出て問いかけてきたのは、利発そうな言動とは裏腹に見た目小学生のやけに幼い少女だった。

「うむ、今日は君たちに良いニュースを持ってきた」

「良いニュース、ですか」

「良いニュース」という単語に、アイドル全員が色めき立つ。自分の中で一番の良い事を思い浮かべては近くの仲間と予想しては発表するなど、中には社長に答えをせがむ者も居る。

男性の表情は、見る見るうちに芳しくなくなっていく。それを知ってか知らずか、高木社長は胸を張って口を開く。

「喜びたまえ、とうとう諸君らにも担当のプロデューサーが付いてくれることになった!」

「プロデューサーッ!?」

異口同音。彼女たちの磨かれた発声はシアター中に響き渡った。

思った以上の反応に気を良くしたのか、高木社長はさらに声を大きくさせて続ける。

「ここに居る彼こそ、そのプロデューサーだ。その手腕は確かでも私も太鼓判を押すこと間違いない。必ずや君たちの後を押してくれるだ

ろう」

あからさまな売り文句だが、しかし彼女たちは今まで以上に盛り上がる。若干数名が冷静に彼の為人を知ろうと観察する目もあるが、大多数が喜びを露わにしていた。

それもそうだろう。これまでの彼女たちは、ステージに立てるとはいえ、知名度も経験値も低い新人アイドル。いつ世間の風に吹かれて消えてしまいかかわからない、儂い灯に過ぎないのだ。そんな彼女らに担当のプロデューサーが付いた、この事実だけでも確かに実感できる一歩なのだから胸を躍らせるのも無理はない。

「では、私はこれから別件があるので失礼しよう。君、後は頼んだよ」「現場まで送らなくても大丈夫なのですか？」

「何、ここからそう遠くはないので大丈夫。途中でタクシーでも捕まえるさ。それに、私もまだまだ現役なのでね、足腰には自信があるのだよ」

腰を叩きながら笑う社長に、プロデューサーは小さく頷く。

「わかりました。では、後は俺の“仕事”ですね」

「ああ、くれぐれも彼女たちをよろしく頼む。これから君の仲間……あるいは家族とも呼べるような娘たちなのでね」

最後の言葉には、返事をしなかった。

調子の良いアイドルたちに軽く挨拶をして去った社長を見送ったプロデューサーは、それから三秒瞼を閉じて振り返り、改めてステージに立つ卵たちを見上げた。

シアターに入ってから感じた今までの印象を、ファンの前では良いものにする。それがまず彼の第一の仕事だ。

その為にまずやらなくてはならない事がある。

両脚を肩幅程に開いて胸を張り、なるべく威圧感が感じられるような腕を組む。意識を塗り替え、鼻で息を吸い喉の通りをよくする。

準備の終えたプロデューサーは、全員の顔を見据えて口を開いた。

「――整列」

決して大きな声量ではなかった。

感情に任せた大喝でもなければ、癩癩を起こして上げる甲高い声で

もない。

それなのに、彼の声はここに居る誰よりも会場内を通り彼女らの耳に響いた。

「聞こえなかったのか、俺は整列と言った」

次はない。そう思わせる言葉に、背筋が震える。

一も二もなく彼女たちはレッスンの時のようにして自然と並びなれた順番に、一列の横並びになって立った。

整列が終わったのを見計らって、彼は再び端から端まで側目した。

「まず始めに自己紹介をしよう。本日付で君たちの担当プロデューサーとなった者だ。これから君たちがトップアイドルとなるべくプロデュースをするのが俺の仕事となる。

今後ともよろしく頼む」

「あの、質問しても良いですか？」

手を上げたのは赤毛のストレートヘアにカチューシャを付けた清楚感の漂う少女だった。

「内容は？」

「プロデューサーのお名前は、なんて言うんですか？」

彼女の質問はその性格と特技が理由になっていた。

田中琴葉は記憶力に自信があり、それゆえ身近な人間の名前は出来る限り覚えようとしているのだ。よって、彼女がこう言った質問をするには正当な理由があるのだが――。

「断る。俺の名前を知ることがプロデュースに必要な。記号としてプロデューサーと呼んでくれて結構。他にも呼び名に制限をするつもりはない、好きなように呼んでくれて結構。

他には？」

「い、いえ、ありません」

毅然と拒絶したプロデューサーに琴葉は言葉を失った。

気難しい、とつつきにくい、冷たい。一連の会話を聞いていたアイドルたちは、全員がこう思った。

暗雲が立ち込める彼女たちを見て気がついていいるのだろうプロデューサーだが、態度を改めるようなことはなかった。

「唐突ではあるが、ここに来てから十数分、君たちを見て思った事を率直に言おう」

脈絡のない評価を前にして、全員の息が詰まる。

「『生温い』それが君たちへの今のアイドルとしての評価だ」

直截的な物言いに劇場内の温度が冷え込んだのは気のせいではないだろう。

自分らのプロデューサーに言われては一蹴するわけにもいかないが、こうもズケズケと言われて黙っているほど物分かりの良い者だけで集まっている集団ではない。

「それは、聞き捨てなりません」

「納得できないか？」

「当然です」

「ならどのような理由があつて反論する、最上」

あるのなら言ってみろ、とでも受け取れる物言いに少女は気迫を示そうとして、最後に告げられた単語に心乱される。

「ど、どうして私の名前をつ」

名前を呼ばれた事に愕然とし、静香は声を乱して問うた。

「これから担当するアイドルの情報をプロデューサーが知らなくてどうする。品物を売る側が誰よりもそれについて知らずに売れるわけがないだろ。君たち全三十七名のプロフィールは全て頭に入っている。

それで、理由はなんだ最上静香」

「くっ、私たちのステージも観ないまま、そんな風に言われて黙って居られるわけありません」

「なるほど、確かに俺は君たちのステージを見た事はない。ましてやレッスン風景すらも」

見たことが無い。改めて彼の口から聞いた言葉に、静香の中で滾る熱量は温度を高めた。

「でしたらッ——！」

「だとしても、仮にそれらを見たところで俺は同じことを言った」

「……ッ！ あなたは」

「し、静香ちゃんダメだよ！」

感情のままに放言してしまう直前で止めたのは、彼女と同年代の未来だった。

彼女は静香の感情的な様を目の当たりにして不安そうな面持ちを隠せない。気がつけば、静香の右手は彼女の両手によつて繋がれていた。——否、拘束されていたと言つても過言ではなかった。

あのまま未来に捕まれなかったら。そんなもしものその後を想像して、自分が如何に考えなしたかかを思い知った。

「ごめん未来、私……感情的になり過ぎたみたい、ありがとう」

「ううん、気にしない気にしない。いっつも私が助けられてるんだもん、言いつこなしだよ」

「話しは終わったか」

プロデューサーは変わらず眠たげなのか睨んでるのか判然としないう眼差しで二人を見ていた。

頭が冷えたのか、静香は未来の手をそつと離してプロデューサーと向き合った。

「すみませんでした、少し感情的になってしまつて」

「構わない。俺がプロデューサーだと分かつた以上、それらを隠す必要も理由もない」

「……？ どういう意味ですか？」

遠回しな彼の良いようがいまいち上手く飲み込めない静香は首を傾げる。だがそれは彼女に限った話ではなかった。他のアイドルたちもまた、彼の物言いを理解出来なかつたのだから。

プロデューサーは呆れた様子もなく、静香の問いに答えた。

「俺が君たちを“生温い”と言つたのは何も最上の言うような、ステージやレッスンなどについてではない。全員が例外なく、優劣なく生温いんだ」

「理由を、聞いても良いですか？」

「今後に必要な通過儀礼だ、是非もない。」

俺がここに入った瞬間、君たちは社長を前にして返事をした所までは良かった。そこに關してはよくレッスンを重ねているだけあつて、

ある程度の息は合っていた」

思いもよらぬ切り口で褒められた一同は、それまでの態度との差異にどう反応していいのかわからず戸惑っていた。それほどまでに、彼の第一印象は最悪だったのだ。

「だが、そこからだ」

当然、印象通り彼の立言が始まった。

「君たちは出だしを帳消しにする勢いでアイドルらしからぬ姿を明け透けに見せていった。仮にもステージ衣装ではないとはいえ、舞台上に立っているにも拘らずだ。」

アイドルであるなら……在ろうとするならば、他者の前では常にアイドルとしての己を見せなくてどうする」

「でもここに居たのは社長とプロデューサーくんだけじゃない、それなら他人じゃなくて身内ってことにならないのかしら？」

「百瀬、君のいう事は最もだ、その反論は至極正しい。俺も身内に対しての態度にまで五月蠅く言うつもりはない」

「だったら」

「それは俺がプロデューサーだと分かった。今だからこそ言える言葉だ。君らは皆、社長がプロデューサーであると発表するまでは赤の他人、誰とも知らぬ輩だ。しかも社長が連れてきた人間なんだ、重要な取引先という可能性も生まれてくる。」

その仮定も想像しないまま「他人」の俺を前にしてプライベートを包み隠さず見せるのは、考えが甘い。

だからこそ、俺は言ったんだ。生温い」と。

たった一度の油断が失敗を生む。この世界ではそのたった一度の、取るに足らない失敗が致命傷になる事もある。それほどまでに厳しい世界なんだ。ここは」

有無を言わせぬプロデューサーの厳責は続く。

「その覚悟も無いのなら、アイドルなど初めから目指すのは辞めろ。本日中にここを去るのならそれもよし、止めるつもりはない。」

上を目指さない者に階段を昇る資格は無い」

始めから今日は社長がプロデューサーを連れてくる。そう忠告さ

れていれば、彼もここまで厳しく言うつもりはなかった。しかし、彼
はあえてそれをしないように社長と小鳥に言い含めた。

ありのままの彼女たちの姿勢を確認することで、あえて彼は自分の
存在を包み隠した。

過去に同じような事を言おうとして、しかし先んじて封殺された一
人のアイドルの事を彼は思いだした。彼女は誰ともしれぬ初対面の
彼に対しても油断なく自分を作り、アイドルとしての顔を見せ続け
た。だが、それはもう過去の話。

去来した映像と感傷を遠く置き去りにして彼は前を見る。

「反論があるなら聞こう。百瀬、君はどうだ」

「うーん、プロデューサーくんの言い分も間違っていないし、私の意見が
通った挙句に一本取られたわけだしもう何もないわ。降参よ」

気楽に諸手を上げる莉緒はそのまま肩を竦めて口を閉じた。

「そうか」

「それに、こうも言われて逃げ出す程、私も甘ったれたつもりはない
わ」

「他にあるなら聞こう。遠慮をする必要はない」

だが莉緒以降、誰も意見を述べる者は居なかった。また、去る者も
居ない。

それほどまでにプロデューサーの意見が正論だったのか、それとも
自分自身に今日以前で思い当たる節でもあったのかは分からない。
あるいは彼の横柄な態度に反発心を持つての事かもしれない。

緩んだ意識に一石を投じる。確実に階段を上る為に必要な事の一
つを終えたプロデューサーは、改めて全員を見渡して次なる言葉を広
めた。

「それでは最後に、一つ変更事項を通達する。これに関しては反論は
一切聞かない。決定事項だ」

再び威圧感溢れる声と言葉にアイドルたちは背筋に冷たい何かが
奔り、佇まいを直した。

一体何を変更するというのだろうか。これまでの彼の言動を鑑み
ても、誰も一切想像がつかない。

しかし、それがどんな荒唐無稽な事であろうと、曲げるつもりがないのだけは理解出来た。

彼女たちが固唾を呑んで待つなか、彼は一言、ある事項を全員に通達した。

「——これより俺が許可するまで、当シアターでの定例ライブは無期限の開催停止とする。以上」

瞬刻の沈黙の後、限界まで引き伸ばされたゴムのように張りつめた糸が、瞬く間に破裂した。

ああも厳粛に言ったにも拘らず、それでも文句の声をあげる辺り肝が据わっていると、プロデューサーは自身の中にある彼女たちへの評価を一つ改めた。

かくして彼女たちは念願であった担当プロデューサーを得るに至ったわけだが、癖しかないような人格に幸先を不安に思う者が居るのもまた事実であった。

——だけど。

「嫌なら辞めろ、止めるつもりも責めるつもりもない。

だが、ついてくる気があるなら——高みから見える景色を觀せよう」

もう少しだけ、ついて行こう。

そう思った春の三日目であった。

第二話：誰でもない誰かに戻る

新たなプロデューサーが入社し、765プロ事務所で簡潔どころか不足していると思える自己紹介を終え立ち去った後の事務所では、一人の少女が怒気を隠すことなくむしろまき散らすように声を荒げていた。

「どうしてあいつが戻ってくるのよッ！ 冗談じゃないわ！」

言うまでもなくそれはあの場において唯一、敵愾心を露わにしていた水瀬伊織だった。

彼女は突然舞い戻ってきたあのプロデューサーが気に入らないらしく、この場に残り事情を知るただ一人の事務員に向かって噛みついていった。当然、比喻ではあるが彼女の勢いは今にも行動に移さんばかりだった。

「そ、それはね伊織ちゃん、彼が戻ってきたのは社長たつての事であつて、あたしも詳しくは知らないのよ」

「なによそれ、じゃああいつは社長がわざわざ出張つて、とつ捕まえて引っ張つて来たつて事?!」

「二応、そう言う事になるのかしら」

これまでも伊織が癪癪を起すことは少なくなかった。というよりむしろ多いと言つてもいい。しかし、これほどまでに怒りを露わにしたことは滅多になかった。

彼女とて一人のアイドル。一般人よりも早く社会へと出た事もあつてか、人一倍大人な面も持つているそれらをかなぎり捨てるなど滅多になかった。

持ち前の気の強さもあつてか、冷静さを取つ払つた伊織の詰め寄り方は尋常ではない。基本的に穏やかで平和主義な性格である小鳥も、これには参つてしまったのか霞んだ苦笑いを浮かべながらやり過ごそうとしていた。その目尻にはうっすらと涙さえ覗える。

「で、でもそんなに彼が嫌なの伊織ちゃん？」

「当然に決まつてるじゃない！ 小鳥も知らないわけじゃないでしょ、あいつの汚いやり口を！」

忘れもしない、忘れられるわけがない。

己に言い聞かせるように声のトーンを落として呟く伊織。

何がそこまで彼女を駆り立てるのか、気になった他のアイドル面々はそれを聞こうか聞くまいか悩んでいる様子だった。が、彼女たちの中で事情を知らず、かつ能天気で今の伊織を突く事が出来るのは一人しか居なかった。

「ねえ、でこちゃん」

「でこちゃん言うなって言ってるでしょ！ なによ美希ッ！」

腰まで伸びるウェーブした金髪の少女、星井美希がいつもと変わらぬマイペースな声色で呼びかけると、フリスビーを投げられた犬のように勢いよく伊織が振り向いた。矛先が美希へと向いたことで解放された小鳥が安堵の息を吐いていたのが、やけに印象的であった。

「なんでそんなに怒ってるの？ あの新しい人がでこちゃんに何か悪いコトしたの？」

確信とも言える質問の矢が伊織を射抜いた。

何故そこまで感情的になるのか聞きたくはあったが、なにもそこまで一直線に言っただけはなかった。

表情が固まったまま背中に冷たい何かが流れるのを、まるで他人事のように感じながら彼——もう一人の男性プロデューサーである赤羽根は、どうか伊織のかんしゃく玉が更に炸裂しない事を祈るしかなかった。

「それはっ……」

「それは、なんなの？」

てつきり勢いそのままに暴露するのだろうと思っただけだが、彼女は美希の追求を前にしてその威勢を萎めていった。しおらしく肩を窄める伊織は難しい表情で考えるように俯いてしまう。

「ねえねえ、新しい人と何があったの？」

止せばいいのに美希はさらに伊織に向かって好奇心の槍を突き立てる。

伊織が何を悩んでいるのかはわからない。しかし、彼女はあの新しいプロデューサーを嫌悪しているのは間違いない。なのにその理由

は話したくはない。

過去に何があったのか考えさせられる問題ではあるが、彼は社長たつての願いによって戻ってきた人材だ。色々寛容な社長ではあるが、越えてはならない一線は弁えている筈。そんな社長がわざわざ連れてきただけの人間を、赤羽根はそう易々と疑えなかつた。というのも彼がどうしてこうも前向きに考えるのかと言うと、伊織以外の二人……つまりは小鳥ともう一人、秋月律子が新しいプロデューサーの出戻りに表立って反対していないからである。

だから、伊織には言えない何かがあるのだと好意的に解釈し、赤羽根は二人の間に立つことにした。

「そこまでしておけ美希、伊織が困ってるだろ」

「むう、ハニーはでこちゃんの味方するつもりなの？」

「味方とか敵って話じゃないだろ。仮にそうだとしても、俺は765プロの……つまりどっちの味方でもある」

「屁理屈なの」

膨れっ面で唇を突き出す美希はそう言いつつも、さほど興味があるわけではないのかそれ以上の追求をすることは無かつた。単に気になっただけ、なのだろう。彼女としては聞けようが、聞けまいがどちらでも良かつたのかもしれない。

美希が目的を失いふらふらとソファアへと向かうのを、それまで伊織が喚いていたのに珍しく静観していた律子が止める。

「コラ美希、そっちいかないの。これから仕事なんだから、間違っても寝るんじゃないわよ」

「き、気のせいなの。律子、さんの考え過ぎだつて思うな」

理知的な律子の眼鏡が美希を捉えて光る。

アイドルとしてだけでなくプロデューサー業も兼任している彼女は、当然アイドル達のスケジュールを把握している。

「今日は美希と真、それと貴音の三人一緒だから先に下に降りてなさい」

「わかつたの」

「では、参りましょう」

「うう、なんでまたボクだけ……」

三人の中で一人落ち込んだ様子で肩を落とすボーイッシュな少女だけ、外へと向かう足取りが重い。

彼女がこうして不本意そうに落ち込む姿は、事務所内の面子には珍しくもない光景だ。

というのも、

「真はそんなに嫌か？ 今日の仕事」

「だって、今日の仕事って雑誌モデルの仕事なのに……ボクだけ男性誌じゃないですか。そりゃ仕事ですから嫌だとは言いませんけど、それでも納得出来ませんよ」

などと赤羽根の質問に下唇を出して拗ねる菊地真は十分に女性的で可愛らしいと、少なくとも赤羽根にはそう思えた。

「大丈夫、真はどんな格好をしても十分に可愛らしい女の子だよ」

「そっ、そうですか……えっへへ、それじゃあ行ってきまーす！」

「いくらなんでも単純だぞ……」

掌を返して照れたように微笑み外へと向かう真の背を見送って、半開きになった口から漏れた言葉は呆れか、はたまた彼女の単純さへの悲哀か。日焼けした見るからに活発そうな我那覇響は呟き、肩に乗るペットのハムスターのハム蔵と頷き合った。

「よっし、これで資料は全部揃ったな。こっちもそろそろ行くぞー、みんな準備は出来てるか？」

赤羽根プロデューサーがデスクでファイルを纏め、三人のアイドルの顔を窺う。

「もつちろん！ 兄ちゃんに言われなくてもバリバリお仕事しちゃうよっー！」

「ばっちしですー！」

「自分も行けるぞ。今日も完璧にこなしてみせるさー！」

双海真美、高槻やよい、我那覇響の三人が元気よく返事をした。

赤羽根を中心に横並びになって事務所を出て行く。

「残ったみんなも、各自スケジュールの見間違いに気をつけてな」

「間違えに気をつけるのはあんたの方でしょ」

「ぐっ……痛い所を」

気を使つて注意を促したつもりが、伊織によつて余計なひと言であつたと痛感させられながら苦い顔で赤羽根は事務所を出て行った。

六人のアイドルと一人のプロデューサーが出て行った後、律子もまた資料を纏めて席を立とうとしていた。いつになく真剣味を帯びた彼女の視線は茫洋として焦点が合っていない。

「……複雑ですか？」

「小鳥さん……。いえ、ただ少し……。どんな顔して話せばいいのかって思つて」

自嘲気味に薄く笑う律子は資料を入れたカバンを肩に掛ける。

彼がこの事務所に再び足を踏み入れた、という事実を目の当たりにして律子は瞠若していた。それ故か、話しかけるタイミングも掴めぬまま彼は足早に事務所から出て行ってしまった。その背中が、律子には逃げているようにも見えたのは気のせいだろうか。

「あの人には酷い事をしたと思います」

「でも彼は、そう思つてないかもしれないわよ。私にはそう見えましてけど」

「私がそう思っている以上、これは変わりません。なるべく早く、あの人は話しておきたい所です」

キツ、と顔を上げて律子は前を向く。

決意の炎が灯った彼女の顔は、もうプロデューサーとしての頼りがいのある顔になっていた。

「それじゃあ下で待たせてるので、行ってきます。後はよろしくおねがいします小鳥さん」

「ええ、いつてらっしやい」

仕事へ向かう律子を見送り、小鳥は給湯室へと向かう。単純な根気と集中力を要求される事務作業には欠かせないコーヒーを淹れる為に。

「あらみんな、どうかしたの？ 仲良く集まってる」

「あ、あのっ……」

萩原雪歩が顔を出した小鳥に意味深な視線を送っていたのが気に

なつて問う。

給湯室には臍を曲げた伊織を除いて五人のアイドルが、中央の小さなテーブルに集まっていた。いつもと変わらぬ千早以外の表情を見るからに、彼女たちも知りたいのだろう。そう小鳥には見えた。

「新しく来たプロデューサーさんが、質問なら小鳥さんにしろって言ってましたけど、どんな人なんですか？」

伊織があんなに嫌つてると……思いたくないんですけど、そういう人なのかなつて」

明るい笑顔がチャームポイントの天海春香が難しそうに眉を寄せ上げる。

他のメンバーも同意見なのか、静かに小鳥の答えを待っている。その中、意外な人物が口を開いた。

「わ、私は、そんな悪い人には……思えなかつたです」

「雪歩ちゃん」

「お茶の味を褒めてくれた時の、あの人——プロデューサーは顔は怖かつたけど、優しい声でした」

たつた一言か二言交わしただけでそこまで思えるとは。男性恐怖症の雪歩がここまで彼を積極的に擁護するような言動をとるとは、小鳥も思わず驚きで声が詰まってしまった。

でも、彼女の意見を否定する気にはなれない。

「そうね雪歩ちゃんの言うとおり、彼は悪い人ではないわ……ただ途轍もなく不器用なだけで」

二年経つても変わらぬ一貫した態度を思い出して、小鳥はそう言つてほほ笑んだ。

※

衝撃の発表を終えた劇場にて、プロデューサーは劇場内にある事務所兼談話室の隅の一角、作業机の前に座っていた。

アイドルたちはスケジュール通りにダンスやボーカル、ヴィジュアルなどのレッスンを受けにレッスン場に行っている。なにしろ彼の

登場は確証が無かった為、時間が空いているわけではないのだ。それでも全員が突然の招集に対応出来たのは、彼女たちが新人アイドルだからだろう。

淀みない慣れた指使いでパソコンのキーボードを叩き続けるプロデューサーは考える。

彼女たちを売り出すにはまだ情報が足りない。顔とプロフィールに書かれた以外の事しか、彼はまだ知らない。売り出す人間が誰よりも知らなくては話にならない、と彼女たちに言った以上このままにはしておけない。そうでなくても、彼の性格上絶対に出来ない。

マウスをクリックしてとあるフォルダを開く。中にあるのは彼女たちアイドルの、これまで公演してきた全てステージの動画ファイル。それを一から再生して見ていく。

「なるほどこれは……」

譫言のように呟いてマウスを動かす。動画の再生時間は全体の三割にも届かないで閉じられた。

徐に抽斗を漁りフラッシュメモリを見つけると、それを差し込みデータをコピーし始めた。ここにあるパソコンはデスクトップ型なので持ち歩きが出来ないのだ。

必要なデータを全てコピーしながら残り時間を見て、彼は懐から携帯電話を取ると、アドレス帳に再び登録された高木社長に電話を掛けた。

『どうかしたかね?』

数回のコールで出た社長は平時と変わらぬゆつたりとした声音で答えた。

背景音に聞こえる屋外の雑音と彼の話し方から、今は一人だと彼は判じる。

「劇場の定例ライブ。これを無期限の公演中止にさせていただきますのですが、よろしいでしょうか」

『流石に判断が早いねえ君は。一応、理由を訊きたいのだが?』

「彼女たちは未熟です。現状、この定例ライブが劇場の延命処置ではない以上、やるだけ無駄だと判断しました」

自社の劇場とはいえ一度の建設費だけで支払いが終わるわけではない。

税金やガス・水道・光熱費等、寮という側面も持つこの劇場は建っているだけで金を喰う。加えてアイドル全員とレツスン講師への人件費も鑑みれば、その額は馬鹿にならない。

『君の言うとおり定例ライブが現状では一番の収入になっている。それを取り止めて他に充てがあるのかね?』

「……仮に定例ライブを止めたとして、どれだけ持ちますか?」

『二回分。それが限界だ』

「分かりました。それまでに売り物になるようにします」

二回分……今月と来月の末に予定されていたライブの二回という事。つまりは実質三ヶ月を切っている事になる。

普通ならこのようなりスクの大きい割に、リターンに期待出来ない大博打を打つわけがない。しかし電話口から聞こえる社長の声に怯んだ様子はなかった。

『良いだろう、君を信じよう。中止を許可する』

「ありがとうございます。したがって告知の為に劇場HPの編集を行いたいのですが、IDとパスワードはご存じですか?」

『それなら音無くんに訊いてくれた方が早いだろう。なにぶん、私は機械にそれほど強いわけではなくてねすまない』

「いえ、わかりました。では失礼します」

電話を切って携帯を机の上に置き、プロデューサーは肩を回してコリをほぐした。

これで社長の許可は貰った。後は小鳥に電話をして報告と質問するだけだ。

手に届く範囲に設置された電話を取り短縮ボタンの一を押すと、すぐさま765プロの事務所へとコールされる。

耳元に聞こえる電子音は二回で止まった。

『はい、765プロです』

「765ライブシアター担当プロデューサーですが、取り急ぎ伺いたい事と報告があるのですが、お時間大丈夫でしょうか?」

『ええ大丈夫ですよ、どうかしました?』

午前中に会って話した時とは違う仕事用の小鳥の声を耳にしながら、プロデューサーは頭の中で予め組み立てていた事柄を言葉に変えた。

「まず報告です。無事挨拶を終え、彼女たちの現状を見たところ未だステージに立たせるに至らないと判断しました。よって劇場での定例ライブは無期限の開催中止とさせていたいただきたい。

その為に、当劇場のHPにて告知をしたいので管理者のIDとパスワードを伺いたいのですが」

『え、ちよ、ちよっと待って下さい、中止ってライブの中止っ?』

電話越しに小鳥が明らかに動揺しているのが聞き取れた。

デスクにぶつかる音や、それによって崩れ落ちたのだろうファイルの束が雪崩となって落ちる映像がプロデューサーの脳裏に再生された。受話器から離れたのか、彼女の悲哀の泣き言が若干遠くになって聞こえる。

が、彼はそんな事情は顧みない。仕事ではなく私事であるなら考慮する余地もない。

「そう言いました。幸い、今はライブが終わって間もないので、チケットの発券等もされていない筈。なので怪我をしない内に告知をしたいのですが、いかがでしょう」

『そんなの、あたしの一存で決められないわよお。社長に訊かないと——』

「既に社長の許可は得ています」

『ね、根回しが早いわね』

動揺のあまり口調が仕事からプライベートに変わりつつある小鳥が声を震わせる。

『……わかりました。社長の許可があるなら私に断る権利はないですから。

今から言うのでメモの準備は良いですか?』

「必要ありません、形に残すと漏れる可能性があるので、暗記します」

『そうね、出来るならそっちの方が良いと思います。では——』

二十台前半でも通用するような若々しい小鳥の声がIDとパスワードを伝える。

桁数はそれほど多くなかったので、彼はさして苦も無く簡単に暗記する事が出来た。

「わかりました。ありがとうございます」

『アイドルたちと、仲良くね』

「俺には必要ありません」

電話を切つてすぐに聞き出したIDとパスワードを入力していく。簡素なフォントの文字列が埋められていくのを眺めながら、右手が何かを探して空中を彷徨う。

数秒して彼の意識がハツとなった。

「そうか、コーヒーを入れてくれる人はここに居ないんだった」

たった数時間の内に、自分が思った以上にプロデューサーとしての勘を取り戻し始めているのを実感し、思わず恥じ入ってしまった。睡眠不足なのだろうか。思えば昨晚、社長が訪れてから眠った記憶が無い。色々な準備に追われ、そんな暇も無かった。

昔なら徹夜など当たり前だったのだが、この二年間離れていた事もあって鈍っているのだろう。

ここは765プロの事務所ではない。加えてここには自分一人だけなので、コーヒーを差し入れてくれる人もいないなどという、甘えた考えが過ぎった事がどうしようもなく情けなくて恥ずかしい。

「こんな所、見られていたら彼女たちに甘く見られる。それだけは絶対にあつてはならない」

深く息を吐いてコーヒーを淹れようと思ひ立ち上がろう——とした時、彼の右後方から良い香りのする湯気を立ち昇らせるマグカップが机の上に置かれた。

「はい、コーヒー。欲しかったんですね？プロデューサー」

「……レッスンはどうした馬場」

完全に油断していたせい、プロデューサーの声はいつも以上に固いものになっていた。

なぜ気がつかなかった。コーヒーがあるという事は、この給湯器

で作ったという事。お湯を沸かすなら火を使う、使えば音がするし何よりコーヒーを淹れていれば途中で香りに気がつく筈。

様々な推測が頭を巡るが、差し入れをしてきた馬場このみは彼の思いやりの欠片もない言葉を気にした様子もなく腰に手を当てて僅かに上体を反らした。

「どうしたもこうしたも、もう私のは終わりましたよ」

「そうか、もうそんな時間か」

思った以上に時間をかけてしまっていたらしい。

気を引き締める意味も込めて彼は眉間を揉んで、このみが淹れたコーヒーのマグカップを取った。近づけると確かに分かる香りが鼻を通り抜ける。何故、これに気がつけなかった。

「で、このコーヒーはどこから持ってきた?」

「なんか職務質問をする警察官みたいな口ぶりね。単に私の魔法瓶に入ってたのをに入れて持ってきただけよ」

「何故、魔法瓶に入れてくる? コーヒーならここにもあるだろう」
「別に深い意味はないわ。最近アイリッシュウイスキーにはまっててね、それで自宅で残ったコーヒーを入れて持ってきただけよ」

彼女の証言を聞いて納得がいった。魔法瓶に入れていたのなら、音も無く香りも密封されている為、気がつくまでの時間に置く事が可能だ。しかし――。

彼はマグカップに鼻を近づける。漂ってくる香りは、お世辞にも良いとは言えなかった。

「なるほどそういう理由か、しかし馬場、一つ言っておくことがある」
「な、なに……お姉さんの気の利いた大人の心遣いにときめいちゃったのかしら?」

言動と外見がかけ離れているこのみは流し目をプロデューサーに送った。

本人はこれでセクシーさを出しているつもりなのだろう。彼女のプロフィールの備考欄にもこのような事を仄めかす文章があった。

だが、今は関係がない。

「次からコーヒーを魔法瓶に入れる時はアイスにするか、少し冷まし

てからにした方が良い。淹れたてを注いでは酸化して味も香りも格段に落ちる」

「そ、そうなの？ どうりで家で飲む時と味が違うわけだわ……」

「それと、俺は君より年上だ」

プロデューサーの補足説明に、この目の目が見開かれた。

彼女は身を乗り出して近づき横に伸びた口を開く。どう見ても傍からは奇妙な光景にしか見えなかった。

「嘘おっ!? 背が低いから一つ下ぐらいかと思ってたわ」

「君に言われたくはない」

自分よりも二十cmは下であろうこのみに年下呼ばわりされるのは不本意極まりない。冷静に考えてどこをどう見ればそう見えるのか、彼は理由を訊こうとして……意味の無い事だと思いなおして止める事にした。

「こ、このセクシーなこのみお姉さんに向かって……」

平静を保つプロデューサーと違って、このみは彼の言葉が気に障ったのか眉根を寄せ身体を震わせている。

シバリングのように震えるこのみを、いつもの眠いのか睨んでいるのか判別がつかない眼差しで観察しながら結末を待つ。——と、彼女は何を思ったのか深く吐息をついてかぶりを振った。

「ま、良いわ年上なら敬語で話したほうが良いのかしら？」

「俺に敬語は必要ない。敬う必要もない。ただ俺の言うとおりに行動してくれればそれでいい」

必要なのは効率とそれに見合う実力。だからこそいま彼はスターラインに立たせる為に行動している。

「なら好きにさせてもらおうわね、でもプロデューサーの言い方……他の子には誤解されるから気をつけた方が良いわよ。」

私は年長者だから良いけど、ここにはお子ちゃまもいるんだから」長話をするつもりなのか、このみは長テーブルの椅子をプロデューサーのデスクまで持ってきて座った。彼女が入り込んだ事によって、この空間が事務所ではなく放課後の教室に見えてきてしまう。

「俺を相手に逃げるならこの先残っても意味がない」

「そうじゃなくてー、嫌われちゃうわよって事を言ってるのよお姉さんは」

「そんな事を考えてどうする。アイドルに嫌われようと、俺の仕事は変わらない。好かれたくて俺はここに来たわけじゃないんだ、勘違いをするな」

今の彼はバーテンダーではない、プロデューサーだ。これがバーテンダーであれば、このみにとっておきのアイリッシュコーヒーでも作って、彼女の話に耳を傾けて会話を持続させたであろう。

だが今は違う。彼の思うプロデューサー像に、甘えは不用。むしろ足枷にしかならない。

「プロデューサーって、捻くれてるって言われない？」

プロデューサーの一貫して壁を作る態度に呆れ果てたのか、半眼で片側の口端を吊り上げるこのみはそう問うと、両手を股の前に置いて前かがみになった。凹凸の少ない平坦な胸板が斜面のように傾く。

「言われた事ないな」

「嘘でしょー、絶対言われた事あると思うわ」

このみの追求を聞き流しながらプロデューサーはタイピングを続けていた。レイアウトを指定し、文章を打ち込みHPのトップに載せる。一目見てわかる場所に置かれた公演中止の文字は、全体の雰囲気損なわぬデザインに仕上げられていた。

「……本当に中止になるのね」

プロデューサーの横から顔を出してこのみがモニターを覗き込んだ。

「必要な事だ。今の君たちには——」

「ああ、いいわよ説明しなくても……分かってるから。ステージに立つにはまだ早いつて言いたいんですよね」

「有り体に言えばそうだ」

プロデューサーがマウスを何度かクリックすると、今度はデスクの横に置いてあった印刷機が音を立てて稼働し始めた。

出来る事なら、これを今日中に終わらせたい。時間はもう残り少ない。

次々と印刷されていく用紙を眺めながら、このみが淹れ劣化したコーヒーを流し込む。元バーテンダーとしては許されない味だが、今や違う職業。これに関して口煩く言うつもりはなかった。

「いいですよ別に、不味いなら飲まなくなっちゃって」

ただ彼の表情が険しいものになっていたらしく、目敏く見ていたこのみの眉が下がっていく。

ここに居たのが自分ではなくもう一人の男性プロデューサーであれば、なにか気の利いた慰めでも彼女にしたらだろうが、生憎と現実とは違う。アイドルの精神ケアもプロデューサーの仕事と言われるかもしれないが、そうした結果にこちらを信頼されては……。

「次から淹れなくていい。自分で飲む分は自分で淹れる」

「……そう、余計な事したみたいね、ごめんなさい」

悲観するようなこのみの謝罪を聞いてプロデューサーは安心する。

これでいい、好意的な心象は今後の妨げに、それも致命的な罫となって彼女自身の道に張り巡らされてしまう。自分が好かれればどんな結末が待っているのか知っている彼は遠ざける。経験と歴史が言っているのだから。

椅子の足が床を擦る音が聞こえる。横目に盗み見れば、このみが席を立ち椅子を元の位置にもどそうとしていた。もう一緒に居たくないのだろうか——それでいい。

腕時計で時間を確認する。どうやら、今度は予定通りに終わったようだ。

「そろそろ全員のレッスンは終わる。そしたらここに集合するよう伝えるように」

「……わかったわ」

軽い扉が重苦しい音を引きずって閉まりこのみが居なくなる。

最後の彼女の言葉、口調こそ変わらぬが彼我の間に乗り越えようのない心の離隔を思い知らされる固い声だった。閉じられた扉が音を立てないように配慮されていたのは、彼女が自称するオトナとしての矜持だろうか。

改めてプロデューサーは印刷された用紙の束を持って考える。

何故、社長はこんなやり方しか出来ない自分を態々呼び戻すのだろうか。現時点で考えている案が成功すれば、間違いなくシアターの存続は今のような自転車操業ではなくなるだろう。仕事を取ってくるのは苦ではない。他人の隙間に入り込み付け込む術には自信があるのだから。しかし……。

「客とアイドルを相手にするのはや訳が違う。随分と分の悪いギャンブルに乗せられた気分になるが、選んだのは自分だ」

手首に巻いた腕時計に触れる。彼女はついぞ気がつかなかったが、これは彼の過ちを形にした物。罪と罰の象徴。

戒めに巻いたソレがやけに重く感じながら、プロデューサーはアイドルたちが集まるのを待ち続けた。

見立て通り、然程時間も掛からずに彼女たちアイドルは事務所兼談話室に集まった。

流石に三十七人も集まると手狭だ。シアターが大きいとはいえ、この部屋まで規格外に広い間取りと言うわけではない故、その人口密度に熱気すら感じる。現に彼女たちはレッスンを終えたばかりでシャワーも浴びていないので体温も上昇している。

どうして浴びてこないのか、と思った所で彼女たちがプロデューサーに懐く印象が、思った以上に上手く嵌ってくれているのだろうかと考え至った。

「手短に済ませよう、これから聞く事を良く聞け」

雰囲気重い。息苦しさはまるで山頂にでも居るかのようだ。

「通達の通り公演は中止、これは社長も許可を出した。よって当劇場HPにもその旨は更新済みだ。」

そして俺が仕事を持って来ない以上、君たちはレッスンをする他にやれる事はない。つまり今の君らは——アイドルではなく誰でもない一般人に戻ったという事になる」

この男は喋る度に動揺させなければ気が済まないのか。そう思わんばかりにアイドルたちがざわめき始める。

それもそうだろう、ライブは無し、担当プロデューサーが付いた以

上彼が仕事を持ってくるがそれも無ければ……ここは単なるアイドルを夢見る巨大な養成所に意味合いを落としてしまう。

必然、脅迫めいたプロデューサーの説明に黙っていられるわけもない。

「ふふ、随分と底意地の悪いプロデューサーさんですわね。そんな事を仰って、私たちをどうしたいんですようか？」

口を挿んだのは、慈母のような聖人の微笑みを浮かべながら睥睨する天空橋朋花と、

「桃子に逆らわないなら、ちよつとぐらいは大目に見てあげようかと思っただけど……お兄ちゃんは桃子をプロデュースするつもりがないって事だね。それなら、いなくてもいいよ」

踏み台に上がって玻璃のような感情を排したような温度の無い視線を向ける周防桃子だった。

「おつ、おい止めとけて朋花、相手はプロデューサーだけ」

「桃子も止しなって、意地張ってそんな事言わなくても」

近くにいた永吉昂と福田のり子が彼女たち二人を制止するが、馬耳東風よろしく彼女らが止まることは無かった。

プロデューサーは二人を見ながら全体の顔色を窺う。似たような面持ちの人間が数人、面倒そうにしているのが数人、怖がる者、意味を理解出来ていない者や無関心な者と様々だが、彼に好意的な心情を懐く者は見たところ一人も居ない。唯一、判断しかねるのが観察している彼を観察し返している見た目との差異が激しい馬場このみだけ。

「天空橋、周防……嫌ならば辞めて結構だ。今の内から恣意的に選り好みする者に仕事を回す程、俺は暇でもお人好しでもない。」

特に周防、君にはわからないか？」

「わからないって、何が？ わかってないのはお兄ちゃんの方でしょ、仕事もライブも何もしなくて残っていられる世界じゃないよ」

このシアターに来る以前から桃子は数多くの映画などに出演した経歴をもつベテラン子役であった。この場に居る誰よりも、芸能界を見て知って経験している彼女だからこそその意見なのだろう。

着眼点は悪くない。経験に裏打ちされた度胸と自身は評価に値す

るだろう。しかし、やはりまだ子供、十一歳という若すぎる年齢では見えるものの高さが足りない。

「そうだ、この世界は甘くない。勝者だけが頂点に君臨し、敗者は塵と成ってその余韻を送りながらに朽ち果てるだけ……それがこの世界。子役として活躍した君はそれを十二分に味わった筈。」

それでもなお、見ないふりを続けるつもりか？ それとも俺の過大評価か、存外に年相応の子供だったというわけだ」

「なっ、桃子の方がこの世界では先輩だよ!?!」

「君の演技力は確かだ、俺もいくつかの作品を見た事があるのでそこは評価する。しかし、アイドルとして出来損ないの君たちを世に出してやり過ぎし続けていられるほど、この世界は寛容ではない」

出来損ない。遠慮のないプロデューサーの言葉に桃子や朋花だけでなく、他のアイドルたちも固まった。

プロデューサーの説明は続く。

「自覚の薄さと生温い覚悟で立つステージを観て、ファンの心が掴めるわけがない。

だから俺は君たちを、一ヶ月の間でスタートラインまで鍛え上げる」

「つまり、強化合宿と言うわけですか」

厳粛に宣言したプロデューサーに静香の静謐な声が答える。

「ここには学生も居る。よって実生活に支障が出ないように調整はするが、そのぶん土日や祝日は丸々使い切ると思ってくれ。」

幸い明日は土曜日、朝の六時から始めるので、本日は各々が思うように余暇を過ごしてくれて結構。間違っても根を詰めようとして体力を無駄に消耗しないように。以上、解散」

「あつ、あのつ、質問してもいいですか?」

劇場を出る用意をしようとして、矢吹可奈がぎこちない速さで手を上げた。

「答えよう。なんだ?」

「……その特訓を乗り越えたら、私は認められるように……見上げるばかりだった憧れの人達に届きますか!?!」

彼女はどこか自分の伸び悩みが気がついていたのだろう。プロデューサーに訴えかける双眸には懊悩の光が揺らめいていた。

プロデューサーは彼女らに対して韜晦するつもりはない。実力を隠したまま従ってくれる程、従順には見えなかったから。だからここで答えられる言葉は一つ。

「当然だ。見上げるだけなのは、もう疲れただろ」

「——ハイッ！」

真ん丸に見開いた可奈の双眸が輝きを増し、鮮やかな色彩で彩った。あるいは、彼女の始まりはここからだったのかもしれない。

「しかし、乗り越えられなければそれまでだ」

飴と鞭の匙加減を面倒に思いつつ、プロデューサーは突き放す様に言い捨てた……。のだが、どうにも可奈は彼の言葉を前向きに解釈したのか、爛漫な笑顔でこちらを見ている。

やり過ぎた——後悔しながら彼は荷物を鞆にまとめて持ち上げた。

「プロデューサー、どちらへ？」

「ここでの必要な仕事は終えた。事務所に向かい、そつちで必要な仕事をするだけだ。今日はもう戻らないのでそのつもりで」

琴葉の問いかけに、なるべく簡潔に答えてプロデューサーはその場を後にした。

彼が居なくなり事務所としての機能を必要としなくなった談話室で、立ち去った彼の背中を視線で追っていたこのみは深く吐息をついた。

「やつぱり……捻くれ者じゃないプロデューサー」

やる気に燃える可奈を見て、このみは年相応の包容力ある微笑みを浮かべて歩きだした。

※

社用車を走らせたプロデューサーは765プロの事務所があるビルへと到着し、壊れたエレベーターを冷めた目で一瞥すると階段を昇り始めた。静寂が住み着いた階段は、彼の来訪を歓迎するように足音

の余韻を長引かせる。

夕方も終わりに差し掛かり夜を迎えようとしている空の下、ビル内は立地ゆえか、それとも切れた蛍光灯のせいかわ外よりも薄暗い。足元に生まれた薄い影を見つめてみると、どこまでも呑み込まれそうな、そんなありえない想像が鎌首をもたげた。

寝不足が祟っているのだろうと判じ、プロデューサーは階段を昇り切って事務所の扉を開けた。

「戻りました」

「あつ、おかえりなさい」

プロデューサーを迎えたのは緑色のベストを着た事務員の小鳥だった。

事務所にアイドルの姿はない。社長も仕事をしているのか、それとも帰ったのかは知らないがここには居ない。

「秋月とプロデューサーは仕事ですか？」

「ええ、まだ律子さんは現場で、プロデューサーさんは今の時間だと多分営業中だと思います」

小鳥はデスクに座ったまま椅子を回し、後方の壁に掛かったホワイトボードのスケジュール表を確認しながら答えた。

彼も、彼女の視線を追うようにして壁のスケジュール表を確認する。今の時間から少なくともあと三時間は帰ってこないだろう。完全に退社時間を過ぎてしまうが、芸能事務所にはそのような言葉はあってないようなものだ。代わりに午前中はオフなど時間にある程度の自由が効くようになっていてただけマシだろう。

「そうですか、ではそれまで他の仕事でもして待ちます」

「今日はまだ初日ですから、そんなに根を詰めなくても良いんじゃないですか。過労で倒れちゃったらアイドルたちも心配しますよ」

「いえ、やらなくてはならない事がありますから。彼女たちは休息が必要でも、その分俺が動かなくては道を見失います」

「それをみんなの前で言えれば、不安はないのだけど……ちゃんともんなとコミュニケーション取れます？」

初めて彼がここに来た頃を思い出したのか、小鳥は心配そうな面持

ちで彼に問いかけた。

プロデューサーの脳裏に一人の少女が思い浮かぶ。少女とは始めこそ険悪な関係だったが、時間が経過していくにつれ次第と心を開き信頼を預けるに至った。お互いがお互いを高め合う、いつかこの低迷しているランクを上げて、共にトップへと登ろうと。……しかし、それは叶わなかった。

「信頼は要りません。良い結果が伴えば、それでアイドルは登れますから」

「……素直じゃないんだから」

嘆息して小鳥が席を立った。

プロデューサーは彼女を追うことなく、あらかじめ社長によって用意された彼のデスクに座りノートパソコンを開いた。

あらかじめ劇場のパソコンからコピーしたフラッシュメモリを差し込みフォルダを開く。中には彼が序盤を見て閉じたシアター組アイドルたちのライブ映像が入っていた。数は三つ。今年に入ってから始まったプロジェクトだという事が解る。

改めて、一から再生していく。

モニターに映る彼女たちは緊張のほぐれきっていないぎこちない笑みを浮かべている。彼女らのパフォーマンスを見ながら、プロデューサーは劇場の入客数と年齢、男女比を大まかに分けたデータを確認する。総合した数をグラフにすると線は右上に向かず、二回目の公演で下降し、三回目には数は増えも減りもしない。

ハッキリ言って成否でキツチリ分けるなら、この三回は失敗と言えるよう。

「はい、どうぞ。それって、あの子たちのライブ映像ですね」

小鳥がマグカップを二つ持って戻ってきた。湯気の立ったそれからはコーヒーの香りが漂っていた。

一つをプロデューサーの前に置いて、彼女はモニターを覗き込んだ。

「ありがとうございます。ええ、よく取れています。撮影者が彼女たちを良く見せようと努力しているのが感じられました」

「うふふ、撮影したのはウチのプロデューサーですよ。……なにぶん予算が無かったのだから」

通りでアングルに変化を感じられないわけだと、納得のいったプロデューサーは続きを視聴する。

小鳥の口ぶりからして撮影したプロデューサーというのは男性の方だろう。律子であれば、彼女はプロデューサーと呼ばずに「律子さん」と呼ぶだろうと彼は想像した。

映像ではそれぞれのソロ曲と全体曲が二曲で、それぞれ開幕と閉幕前に全体曲を持つてくる構成となっていた。

「この曲は、全て彼女たちに作られた曲ですか？」

「ソロはそうですけど、全体曲に関しては元々765プロにあった曲のカバーという事になります。全員が一度はステージに立ったとはいえ……そこまでは人手不足で追いつかなくて」

「ではすみませんが、765プロ版権の曲のリストと、そのデータを全ていただけますか？」

使える時間全てを使っても足りるかどうかが、知らなくてはならない事が沢山ある。

二ヶ月後の六月末に行われる定例ライブまでに、彼女たちの為に作らなくてはならない物もある。一ヶ月の間に少なくともスタートラインに届くようにして、それから入客を増やすための仕掛けをし、満を持して立つステージは——失敗で終わらせない。

時間はそんなに残されていないが、幸い、前プロデューサーの腕が良いのかある程度の土台と楽曲は出来ている。ならば、彼がやるのはどんな事をしても場を整えるというお膳立て。

「曲でしたら、えっと確かここに……あ、あったあった。はいどうぞ、これで全部です」

「ありがとうございます」

データを受け取り、リストに目を通す。総人数五十人というだけあって、その数は計り知れない。

目を皿のようにして側目するプロデューサーは、その中でいくつか見覚えのある曲のタイトルを見つけた。

「この曲……まだ残っていたんですね」

「当然です、この三曲が今の伊織ちゃんを作ったといつても過言じゃないですから」

感じ入るような回顧の言葉が彼の耳朵を震わせた。

気を利かせたつもりなのだろうか、小鳥は彼が差した三曲の内の一
曲を再生した。それは彼がアイドル水瀬伊織へと送った、最後の楽
曲。

しつとりとしたバラード調の前奏が流れ、伊織のウイスペーパーボイス
が鼓膜をくすぐる。

『フタリの記憶』——それがこの曲のタイトル。

「撮り直ししていますね、あの時より……」

「上手くなってる、でしょう?」

「まだ曲の全てが見えてない謳い方してますけどね」

「あら、それなら君が教えてあげればいいじゃないですか、きっと伊織
ちゃんも」

壊れたレコードのように小鳥の言葉がブツ切りになって止まった。
背景には未だ、伊織の歌が流れている。

「今の俺はシアター担当のプロデューサーです、水瀬の事に関しては
今のプロデューサーが教えてくれるでしょう。」

それより、会社の予算や経理のデータを参照しても良いでしょう
か、出来る限りフットワークは軽くしておきたいので」

「え、ええわかったわ」

それからプロデューサーと小鳥は会話もそぞろにそれぞれの仕事
に集中し始めた。

キーボードをタッチする音が忙しく鳴り続け、時折コーヒーを
啜っては作業に戻るといふサイクルを繰り返していた。プロデュー
サーの両耳にはイヤホンが付いていることから、同時に楽曲を鑑賞し
ているのだろう事が分かった。

シアター組のアイドルたちのソロ曲を余すことなく聞いて行く。
レコーディングされた歌は、人の手がある程度加わっているだけあつ
て、ライブよりは上手く聞こえる。何十曲か聞いて行って、とあるア

アイドルの歌が流れた所で、プロデューサーの意識が歌の方へと傾いて行った。

流れているのは劇場で去り際に手を上げた少女の声だった。

決してお世辞にも上手いと言える歌唱力ではない。しかし何故だろう、こんなにも心を打つのはどうしてなのか。

——これは化ける。

プロデューサーは確信を持ってそう思った。自分の感覚が錆びついていなければ、彼女が正しく成長を遂げた上でこの曲を歌った時……それがトツプアイドルへの道を駆けのぼる特急券となるだろう。次第に情報が集まり、彼の中でシアターで練習に励む少女たちの姿が鮮明に色づき始めた。

不意に、瞼が自身の重さに耐えきれずに落ちかける。同時に、首が頭を支える力を瞬間的に失い、額が机にぶつかりそうになったが、寸前の所で耐える事が出来た。

プロデューサーは波濤のように襲い掛かってくる睡魔を押ししのけるべく、新しいコーヒーを淹れて煙草を口に啜える。

「煙草は大丈夫で……したよね、たしか」

「大丈夫よ、善澤さんもここに取材に来て吸う時があるから、気にしないです」

「では遠慮なく、失礼します」

眠気を焼き払うように火を灯し、深く肺の奥まで紫煙を吸い込み吐き出す。半日以上ぶりの煙草は新鮮で、一吸いした瞬間、視界が白く明滅した。

そうして煙草とコーヒーの組み合わせという、非常に体に悪そうな組み合わせを駆使して応急処置をし作業を続ける事数時間。ようやく待ち望んだ足音が聞こえてきた。

社長からは既に直帰になるという連絡を小鳥が受けているので、彼というものは無いだろう。

「ただいま戻りましたー！　もうこんな時間、ごめんなさい小鳥さん待たせちゃって」

戻ってきたのは眼鏡をかけて後ろ髪をアップにして、スーツを身に

纏っている律子だった。どうやら他のアイドルは時間も時間だし直帰なのか、後について来る人影はなかった。

律子は階段を駆け上がったのか額に流した汗を拭いながら自分のデスクへと座ろうと向かい、はす向かいに座るプロデューサーと目が合って足が止まった。

「あ、プロデューサー殿……おつかれさま、です」

「お疲れ様、随分と慌ただしいな、髪が乱れているぞ」

プロデューサーの指摘に律子の手が髪に触れた。僅かに跳ねた髪の毛を撫でるようにして直す。

「す、すみません、気づきませんでした」

「戻って早々ですまないが、シアター組の仕事を取っていたのは君か？　だとしたら、出来る限り詳細にどの会社とどのような仕事を請けたのかを訊きたいのだが」

「そうですね、私が取ってきたのですと……じゃなくて、その前に一つ良いですか？」

律子がかぶりを振ってプロデューサーを真っ直ぐに見つめる。眼鏡のレンズ越しに見える怜悯な瞳が彼を映し出す。瞳に映る彼が少し嫌そうな顔をしていたのは、気のせいだろう。

「なんだ？　あまり長い話だったら先にこっちの質問に答えてくれると助かるが」

「時間は取らせません、ただ一言、言いたいことがあるだけです」
深呼吸をして律子は右手を胸の前で軽く握る。古くなった金属の軋む音が微かに聞こえた気がした。

「……あの時はすみませんでした。知らなかったとはいえ、結果的に……プロデューサー殿を追い出すような形になってしまっただけです」

律子はそう言うのと深く頭を下げた。

謝罪された彼の視界に彼女の後頭部が映り、髪型の違いに年月の経過を嫌でも思い知らされる。

——今更なにを言うのだろう、と律子は思っているのだろうか、頭を垂れる彼女の肩は僅かに震えていた。だがその罪悪感、責任の所在が明らかになっていない虚像へ向けられているのを彼は知っている。

……すべてはタイミングが悪かったただけなのだ。

「秋月、君が気に病む必要はない。あれは隠し切れなかった俺の責任であり、露見したタイミングが悪かったただけなのだから」

「でもそのせいで貴方は、今も誤解を……」

「なら、水瀬には絶対に言わない事を条件に許す。これでいいだろう？ 君にこれ以上頭を下げられては気味が悪くなってくる。慣れない事をするな」

「二応、プロデューサーでもありますから、頭を下げる事には慣れましたよ」

そんな事は知っている。知っているが、自分の知っている秋月律子という女性は事務員兼任のアイドルなのだ。プロデューサーは記憶との乖離に慣れない感覚を懐いた。

気を紛らわそうと煙草を取り出して火を点ける。

「まあいい……それより、そろそろ出て来てくれませんか？ いい加減、この間を長引かせるのも不要な疲労を招きますので」

紫煙を天井に向けて吐き出し、視線を給湯室のパーテーションの方へと向ける。すると、そこからバツの悪そうな笑顔と共に人の良さそうな、いかにもな眼鏡を掛けた好青年が姿を見せた。

「あはは、気づいてたんですか」

「先程、扉が閉まる音が聞こえましたので。この事務所で盗み聞きはまず無理でしょう、あの立ってつけの悪い扉を直さない限り」

「えっ？ あら、プロデューサーさん、帰ってきてたんですね」

「ぶ、プロデューサー!? 居るなら居ると、ちゃんと行ってくださいよっ」

さっきの場面を見られたのでは、と悟り羞恥に染まりながら叱責する律子に、彼は後頭部に手を当て謝罪しながら己のデスクの前まで寄る。

事務所入口からみて手前右が律子で、その隣に小鳥、小鳥の正面にシアター担当プロデューサー、そして彼の隣——つまり律子の正面に今しがた帰って来たプロデューサーの席がある。お互いが向かい合うようにして並ぶ四つのデスクは、長い事一席だけ空席だったが、こ

れでようやくすべてのデスクが埋まったことになる。

蛍光灯の明かりを反射させる眼鏡の奥で、真摯な瞳が見え隠れするプロデューサーは、新しく来たプロデューサーに向いてその口を開いた。

「朝は挨拶しそびれてしまいました。初めましてプロデューサーの赤羽根です。これから一緒に、同じプロデューサーとしてよろしくお願ひします！」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

赤羽根が差し出した右手を掴み、挨拶を交わした。——なるほど、765プロに相応しいプロデューサーだ、と彼は一目見てそう感じ取った。

「所で、名前を伺っても？ プロデューサーでは、呼び方に不便してしまうので」

二人のプロデューサー、ともう一人居るのだが、彼女はプロデューサーである前にアイドルであるせいか、名前の方が先行して浸透している。ここでプロデューサーと呼ばれるのはこの二人だけになる。

そう考えると確かに赤羽根の弁は最もだ。彼もプロデューサーで己もプロデューサーとなれば、呼ばれた日には同じ苗字の人間が同時に返事をする滑稽な絵が出来上がってしまう。

だがそれなら——。

「俺のが後に入ったので、普通に後輩とでも呼んでいただければそれで良いですよ」

「ですが確かあなたの方が先に入社していたんですね？ でしたら先輩のが正しいですよ」

「いえ、俺は一度ここを去った身ですので」

「でも流石に後輩と呼び捨てるのは、ちよつと」

「先輩で良いんじゃないですか？ 君の方が赤羽根プロデューサーさんより年上なんですから、語感としてはそつちのがしっくりきますよ」

譲歩の応酬、イタチゴッコに発展しかけた所を小鳥の一声が場を平

定した。

「えっ、年上……なんですかっ?」

意外だと言わんばかりに赤羽根は声を上げた。むしろ何故年下だと思っただのか、彼としてはそっちの方が驚きだった。

小鳥は驚きを隠せない赤羽根に微笑み頷いた。

「確かー、あれから二年だから……二十六歳になるのかしら?」

「はいその通りです。ですからここでは三番目に位置します」

「ううっ、歳の……歳の話はあく!」

社長、小鳥、そしてその下に控えるのが彼という事で三番目。

年齢の話題を自分から出した小鳥は、己の迂闊さを深く恥じ入って身もだえしていた。

「じゃあ尚更年上だと分かった以上、先輩と呼ばせて頂きます」

体育会系なのか? と問いたくなる程ハキハキとした赤羽根の宣言に、彼はもう反対する気はなくなっていた。

それよりもなによりも、律子が来た時から聞いておきたかった事が後回しになっているのを、いい加減彼は済ませたくて流れを断つように口を挿んだ。

「わかりました、それでいいです。」

では少しいいですか? 秋月にも聞いたのですが、シアター組の受けたオーディションや仕事などの詳細を、出来る限り全て教えて欲しいのですが」

「あはい、それなら、えっと確かここらへんに……あった、これに書いてあります」

がさがさと赤羽根は自分のデスクの抽斗を探し、一つの手帳を取り出した。

シアター組が発足されてからそう経過していないのに、赤羽根が持っている手帳は所々痛んでいて使い込まれた痕が見受けられる。

「随分、奔走したようですね」

「えっ?」

「この手帳、三ヶ月程度でここまでページがよれています。それにこの表紙、頻繁に出し入れしてなければここまで色合いが痛むことはあ

りません」

赤羽根から受け取った手帳を手にとって、鑑定士のような手つきと目利きで全てをつまびらかに紐解いていく。この手帳は、今日まで彼が劇場の少女たちを支えてきた努力の結晶と言えるだろう。

開いたページを流し読みして、今夜の所は後回しだろうと判断して彼は手帳を閉じて顔を上げた。すると赤羽根が呆けたようにしてこちらを見ているのに気がついた。

「どうかしましたか？」

「あ、いえっ、なんか探偵みたいだなって思っつて。凄いですね、手帳一つでそこまでわかるもんなんですか？」

「気にしない方が良いでしょうよプロデューサー。昔からそうでしたから、こつちが知られたくない事まで暴かれちゃいますよ」

律子はそう言っつて半眼で彼を見据えた。一度謝罪を済ませた事もあつてか、気持ちに余裕が出来たのだろう、彼女の発言は昔のように遠慮が無いものになっていた。

「そう言う君はそろそろ靴屋に行つた方が良いでしょう。左足のヒールが消耗しているのか、姿勢が傾いている」

「う……わかつてます、次のオフに行こうと思つていたんですよ」

指摘された左足の踵を上げてその消耗ぐあいを確認した律子の声は、痛い所を突かれたように絞り出されていた。

三人のプロデューサーのやり取りを見ていた小鳥が楽しそうに微笑む。

「ふふ、賑やかで楽しそうですね」

微笑ましい光景だと、そう言う小鳥だった。

だが逆に、プロデューサーとしてはこの空気は歓迎出来るものではなかつた。信頼は謂れの無い裏切りへの引換券になるのだと、痛感していたから。

高木社長は言つた、君の力を貸してくれと。

だからプロデューサーは自分が出来る事をやる。社長には恩と、それ以上の負い目があつた。思えば自分の店に顔を見せた時からこうなる事は決まつていたのかもしれない。だとしたら社長も中々に思

慮深い人物だ。

「そろそろ俺は失礼します」

「上がりですか？　でしたら先輩、夕飯がまだでしたらこれからどうですか、音無さんと律子も都合が良ければ」

「いえ、すみませんがそれはまたの機会にでもお願いします。これから帰って車を取りに行かなくてはなりませんので」

「そうですね、それなら仕方ないですね」

765プロにある車は全部で三台。今日の所は社長が主に使っている車を借りたが、毎日使うわけにもいかない。よって彼は自分の所有する車を持つてくる必要があった。

これから運転する予定がある以上、赤羽根の誘いに参加するわけにはいかない。律子以外は全員成人しているのだから、そんな場でお酒が入らないわけがないのだ。元バーテンダーとして飲酒運転を自らが破るのは決してあってはならないという思いがあった。

「それでは、お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

三人に挨拶をしてプロデューサーは事務所を後にした。

残った三人はそれぞれが帰り支度をしながら他愛ない日常会話を繰り返す。話題は一足先に上がったプロデューサーについてなのは、当然と言えば当然の結果だった。

「にしても、思った以上に良い人そうでしたね。伊織があそこまでムキになるから、どんな人なのかと思ってましたよ」

「伊織ちゃんには伊織ちゃんの言い分があるから、きっとそれがどうしても許せないんだと思います」

「言い分……ですか。それってやっぱり、何かあったって事ですよね」
赤羽根の問いかけに、返事代わりに小鳥は目を眇めて散っていく櫻を憐むように微笑んだ。

「あまり詮索しない方が良いでしょうよプロデューサー」

「スマン律子、そうだな……なんであっても、今は同じ765プロの仲間なんだから」

「きつと大丈夫です、アイドルとの接し方が物凄く不器用な人ですけ

ど、根は悪い人じゃないので。

ああ見えて、とつても熱い情熱を持っているんですよ」

小鳥は肩を竦めてそう答え、窓の外に咲く櫻の木を眺めた。

夜空に覆われ昼間とは様相を一遍させた櫻は、人工的な明かりに照らされ神秘的とも言える胡乱な輝きを放っていた。

「彼は桜の木を護る為に、あえて毒になる事を選んだんです」

「毒……ですか？」

「ええ、他の植物に負けないよう考えて考え続けた結果、毒になる事が一番だと思っただんです」

そしてその毒は手を加えると人を寄せ付ける香りを放つ。

小鳥はそれきり話を続けようとは思っていないのか、一転してどこかへ食事に行こうを言いだした。彼女の意図を察したのでらう律子が話に乗って、プロデューサーに断られた赤羽根も予定が空いているという事で、三人は明かりの消えた事務所を出て、夜空の元を歩き出した。

中天にかかる下弦の月は、人知れず人々を照らし続けていた。

第三話：売り物であるということ

起こすつもりのない電子音が窮屈な店内で鳴り響いた。

発生源である携帯電話の液晶にはAM05:00と映っている。バイブレーションを伴って鳴り続けるアラームは、木製カウンターを叩き続けて持ち主に対し再三に亘つての起床を命じていた。

振動しながら移動する携帯電話があと少しで落下する、という所でカウンターの下からアラームを煩わしく思う乱暴な手が伸び、叩きつけるように対象へと触れた。携帯電話は自発的でなくともどの道、奈落へ呑み込まれるようにカウンターから姿を消した。

昨日から『店主の都合により閉店中』と書かれた紙が貼られたBARの中で彼は目覚めた。

日の光が差しこまない店内は照明の一切を点けてない為に昼夜が逆転しているのでは、と勘違いするほどに薄暗い。

彼は客席を退かして床にシートを挿んで敷いた布団から、睡魔への未練を断ち切れずにいるような緩慢な動きで起き上がった。昨夜は風呂に入っていないなかったのか髪型がオールバックのまま寝癖がついており、非常に……ハッキリ言って無造作では誤魔化せない程に乱れている。

頭髪を掻きながら起き上った彼は、いつも以上に眠たげで睨むような目つきで布団を畳み始める。

眠いのも、睨んでいるのも、そう見えるのではなくまだ眠いから起きたくないから不機嫌でそうなっているのだ。

万年床にしておきたい気分ではあるが、片付けない事には椅子を出すことが出来ない。

彼はカウンターを一瞥して、そこに散乱する資料や手帳に、二日酔いの人間にテキーラを勧める心無い人物へ向けるような吹き出す溜息について、布団を奥へと持って行った。

布団を仕舞ったついでにお湯を沸かしてコーヒーを淹れると、椅子を一つだけ持ってカウンターへと置いて腰を下ろした。

「……くそ、眠い……」

漏れ出た愚痴は死人が気まぐれに吐いた呻き声のように生氣を感じられない。

そもそも二年間もバーテンダーをやっていた彼は、職業柄完全夜型生活に順応していた。だからこんな時間に眠ることは多々あっても、起きるなんて「間違い」をすることは無かった。眠くて当たり前、むしろ自然な形なのだ。と己に言い訳をしつつ煙草を啜えて火を点けた。

吐き出される紫煙がコーヒーの香りを台無しにしているが、そんな事いまの彼にはもうどうでもよかった。

一本吸いきってコーヒーを流し込んだおかげがある程度眠気も覚め、改めてカウンターのの上にある資料を一纏めにし鞆の中へと押し込む。

今日の予定は昨日決めた通り、六時から彼女たちへの集中的レッスンを行う最初の日だ。

たった一ヶ月間とはいえ、始めが肝心だと思っている彼が遅刻するなんて醜態を晒すわけにもいかない。荷物をまとめた彼は新しいワイシャツに着替えてスーツを羽織り——途中で髪型に気がつき応急処置的に直して——訪れる客の居なくなった店の扉を開け放った。

春の四月とはいえ、時刻は五時を回ったばかり。洗礼の如く吹く寒風が頬を撫でつけ、気を抜いて柔らかくなっていた身体が竦んで固くなる。

「これまであまり感じなかった感覚だ。ああ……俺は本当にまたプロデューサーになったんだな」

今度は一人ではない。比較しようもない人数、三十七人を担当するプロデューサーになった彼は、少し重くなったような気がした鞆を持って車へと歩き出した。

劇場に行くのは勿論だが、その前に出社しなくてはいけない。

やることは無いのだが、行く事自体がやることみたいなものなので無視するわけには当然ながらいかないのだ。

車を走らせ765プロの駐車場へと停め、プロデューサーは朝の事

務所へと顔を出した。

時間が早すぎた事もあってか事務所内にはまだアイドルの姿は無く、というよりアイドル以外の姿も無かった。

それもそうだろう、腕時計を見ればまだ時間は五時半にもなっていない。とはいえこのまま誰かが出社するのを待っていたら時間が無くなってしまう。

仕方ないので彼はホワイトボードのスケジュール表に、劇場に居る旨を書き記して事務所を後にした。

六時十分前になって劇場へと到着したプロデューサーは、正面から回り込んで日蔭になっている通路を通る。室外機や消火栓が設置されていることもあってか、劇場正面の入り口に比べ非常に狭く感じる。

関係者用の通用口の前に立つと、扉の右側に設置されたカードスキャナーにキーを通す。素っ気ない電子音が短くなって鍵が開錠され、劇場内へと彼は入った。

廊下を進んで事務所兼談話室へと歩いていると、徐々に人のざわめきが聞こえてきた。どうやら全員もう集まっているらしい。時間を確認すると五分前。もうそろそろ初めても良いだろう時間だ。

事務所の扉を開くと、大勢の瞳が一斉に彼へと集まった。

「おはよう、遅れている者は居ないな？」

部屋の中ほどまで移動して遅刻、または欠席者が居ないかどうかを確認する。幸い、一人も居らず全員が揃っていた。

「おはようございます、プロデューサー！」

声を揃えて年端も行かない少女たち——若干数名成人している者も居るが——に挨拶されると、邪な人間であればえも言われぬ優越感に浸るのだろうか、生憎と彼はそういった感慨とは程遠い人物だった。

「ああ、おはよう。それでは集まっているので、少し早いが始めよう」五分以内であれば誤差のようなものだろうと判じ、プロデューサーは手に持った鞆をデスクに置いて彼女たちに向き合った。

いったいどんな事を始めると言うのか、全員が一樣にそのような物

言いを思わせる表情をしている。先日、ここで大仰に宣言したのも要因の一つとなつてきているのだろう。しかし彼女たちの期待はあっさり裏切られることとなる。

「これから一ヶ月間、集中的に君たちを鍛え上げるとは言ったが、具体的に練習方法があるわけではない。短時間で飛躍的に成長するような練習法など、存在しないのだからな」

緊張の糸が解れる雰囲気の中、彼は移動可能なキヤスターが付いたホワイトボードを持ってきて、そこにこれからの予定を書き始めた。

土日祝日の予定。平日の予定と、午前と午後の二部に分けてなるべく分かりやすく書き記していく。予定を書いている間も、彼は沈黙せず口を開き続ける。

「必要なのは単純な自力……つまりは体力だ。何をするにしても、体力が無ければ何もできない。

踊る事は勿論、歌う事も、笑顔でいる事も全て。よって、ダンスレッスンを集中的に行いつつ、体力をつけるのを重要視したメニューを組む。

とはいえ、今日はそれ程キツくするつもりはない。今日は君たち全員の限界を推し量る日だと思ってくれて構わない」

「あの、プロデューサー」

ホワイトボードに書き続けるプロデューサーの背中に問いかけが投げられた。ペンの動きを止めて振り返ると、志保が年相応の不遜さでこちらを見ていた。

「なんだ北沢、気になる事でもあったか？」

「そこに書いてある『ボーカルレッスン七人』と言うのは、具体的に誰が受けるんですか？」

志保はそう言つて彼の背後、ボードに書かれた文字を指さした。

指先を追つて視線が追いつくと、なるほど、と言葉を漏らしてプロデューサーは志保に向き直った。確かに、時間短縮の為とはいえ、これでは意味が伝わらないだろう。

「この七人はまだ完全には決まっていらない。それを見極める為にも、午前にダンスレッスンを持って行ったんだ。その内容によって、俺の

裁量が変わる。

だからここに名前は書かれていない」

「そうですか、分かりました」

志保が納得して大人しく引き下がったのを確認して、彼は再びボードに予定を埋めていく。

今日の一日の内容はこうだ。

午前に全員でのダンスレッスン。その後、一時間の食事休憩を取り、午後にはプロデューサーが選別した七人でボーカルレッスンを行う。その間、選ばれなかった残りの三十人は劇場ホールへと移動しステージ上でのビジュアルレッスンを受ける。ボーカルレッスンを受けるのは七人二組で、これを前後半に分かれ、万遍なくビジュアルレッスンも受けられるようにする。というものだった。

ハッキリ言って平凡の一言。彼が指示する内容はごく当たり前な組み立てで、数人のアイドルたちも拍子抜けしたような、それまで詰まっていた息が吐き出せたかのように身体を弛緩させていた。

「ではこれから三十分後の七時より始める。各自、レッスン用のジャージ等に着替えて館内のレッスンスタジオに集合してくれ」

千差万別な返事と共に事務所から人がわらわらと出て行った。

全員が居なくなつたのを確認すると、彼はデスクへと向かい自分の鞆からバスタオルとパンツを取り出した。

昨夜も徹夜だった為に、彼は風呂に入っていないかった。一応、臭いや皺が気になるので服は着替えたが、それでもこれからの事を考えると無視できない。

幸いにもここにはレッスン後に利用する為にあるシャワー室がある。普通の風呂場もあるにはあるが、そっちはアイドルたち寮生の利用する為にあるもの。ここに住んでいないプロデューサーが使うわけにはいかない。余計な噂や、いわれのない誹りを受けるのは歓迎できない。

「女所帯というのも、考え物だ」

バスタオルと着替え用のパンツを持って彼は足早にシャワー室へと向かった。

※

着替えを終えてレッスンスタジオに集まった。三十七人という規模を収容する室内は一人一人の身体から醸し出される香りが混ざり合い、不可思議な香りとなって充満している。

女性服のお店に来たみたい、と春日未来は鼻を利かせながらこの場にそぐわぬ感想を懐いていた。

レッスンスタジオにトレーナーの姿はない。元々、彼女たちの自主レッスンも多かった事もあってそこに疑問は懐かなかったが、今日はプロデューサーが居る。彼は限界を押し量ると言っていた。押し量るという意味が未来には正確に思いつけないが、とにかく『君たちの実力を見るぞ』と言っているのだろうと勝手に解釈した。

生まれた瞬間から無愛想を体現していそうなプロデューサーが見に来る。仮に彼がレッスンをを行うのなら、それはいったいどんなものなのか——未来は気になつて意見を求めようと、近くに居た静香に問いかける。

「どんなレッスンやるのかなあ、静香ちゃんはなんだと思う？」

「さあ、まったく見当がつかないわ。もしかしたら案外何でもない内容になるんじゃないかしら。プロデューサーも特別な練習なんて無いつて言ってたし」

控えめに答える静香の言葉で未来は思い出す。確かにプロデューサーは具体的な練習方法など存在しないと聞いていた。てつきり裏技めいた秘策でもあるのかと、昨日の時点では思っていただけあつて未来は拍子抜けした。

だがしかし、プロデューサーの言い分は当然の事なのかもしれない。始めからそんな特別な練習方法があつたら、誰もがそれを採用して実力を磨いているだろう。

「とにかく、始まってみれば分かるわ。本物なのか……口だけの人なのか」

手慰みに己の髪を弄っている静香の瞳は真剣そのものだった。

彼女は時折こんな表情をしては自分自身を追い詰めている。何が彼女を追いたてているのか、何も語らず横一文字に閉じた唇は黙したまま。ただ未来に分かるのは漠然とだが、彼女のアイドルに対する執念は凄まじいものだという事だけ。

「揃ってるな」

扉が開きプロデューサーが現れた。

彼が現れた、それだけでレッスン場に緊張が走ったように静まり返る。

「予定通り、午前中はダンスレッスンを始める」

元々、感情の機微に敏感なタイプじゃない未来ではあるが、この時ばかりは感じ取れるものがあつた。

シャワーでも浴びたのだろうか、血色の良くなったプロデューサーは全員の顔を見回し、小さく「よし」と声を漏らすと、音楽を流そうとCDコンポを再生させようとする。

「まだ君たちには全体曲がない。よって、今まで通り元々765プロにある楽曲を使う。勿論、これは公演で披露したことのある物を使用する」

淡々と語りながらコンポを操作するプロデューサーに、誰一人として同意も反駁の声も上げる者は居ない。

未来は先程に感じ取ったものの正体を理解した。

これは萎縮だ。自分も含めみんなが彼に萎縮しているのだ。試すような台詞を吐いていた静香も、年相応の少女らしく大人しくレッスンが始まる瞬間を待っているし、年少組は彼が怖いのか、いつもの無邪気で太陽のような笑顔が雲間に隠れてしまっている。

他にも気にしたそぶりも見せずにいる者も居たが、未来の視界には映らず気がつかなかった。

「俺から口出しするようなことはない。安心して君たちは踊ってくれ」

言い切って、プロデューサーは再生ボタンを押した。

音楽が流れる。イントロが流れ始め、未来の耳にそれが届いてすぐに曲名が浮かび上がった。

THE IDOLM@STER——先輩たち十三人のアイドルが歌う、ライブ開幕の定番曲の一つとなっている楽曲。

全体曲を持たない彼女たちはこれを自分たちの公演の開幕に持つていくのが定石となっている。過去にまだ三度しか行われていない公演ではあるが、未来としてはもはや己にとっても定番曲になっていた。

よって彼女のみならず、他の少女たちも自然と身体が動いた。

繰り返しの反復練習の成果あつてか、ステップを踏む足運びに淀みはなく、表現を顕著にする腕と手の振り付けにもミスはない。視線は前を、体幹は崩さず、自身の中に染み込ませたりリズムを本来の楽曲リズムと一致させる。

三十七人の少女たちが同じ動きをしている様をプロデューサーは観察している。

未来の視界に、少女たちの前に仁王立ちして観察する彼の眼差しはまるで鏡……もしくはカメラのレンズのようだ。

録画を続ける瞳が映す彼女たちのダンスは、一言で表現するならば“手馴れている”と言ったところだろうか。一見してミスはあまり見られない。僅かに数人、動きが遅れている者も居るが問題はない。

一曲分を踊りきったとき、未来は然程疲労もしていないのに額に汗を流していた。

「次」

機械的なプロデューサーの声に合わせて、まるで音声認識機能でも付いているかのように間髪入れず次の楽曲が流れた。

前説の通り、続く楽曲もやはり765プロのものだった。

休む暇を与えられぬまま未来は再び身体を動かす。数か月前までではありえなかった日常は、彼女の身体に条件反射という練習の成果を獲得していた為、瞬時に楽曲が続いたことに驚きはありながらも踊る。

しかし周囲の様子を見る余裕はもうない。

前を向く視線の先には、やはり彼の眼差しが映る。透明な分厚い板を挿んで立っているような観察の視線は、余裕のない未来と違い様々

な方向へと行ったり来たりを繰り返している。

踊り続け、観察し続けるだけのレッスンは、あと三曲分で一端の終わりを迎えた。

※

小休憩を挿み再びレッスンとは言い難い練習風景を再開させること数回。気がつけば午前中の時間を使い切っていた。

切りも良いと判断したプロデューサーは、簡単に号令して昼食を合わせた一時間を休憩とする旨を伝えてレッスンスタジオを出た。なるべく必要以上にアイドルたちとの交流を避けようとする傾向にある彼は、談話室にあるパソコンで仕事をするのを諦め、ノートパソコンの入った鞆を持って人気の少ないだろう屋上へと上がった。

扉を開け、外へ出ると強い風が彼に洗礼の如く浴びせてきた。一口に屋上と言っても、学校にあるような広く平坦なものではない。幾つもの配管が縦横無尽に張っては交差しあい、彼にもよく分からない物が多く屋上には設えてあった。恐らくはこの劇場の機能を十全に發揮するためのものなのだろう、と当たり前に判じて、壊さないように足元に気をつけながら進む。真っ直ぐと配管を避けながら進むと、彼の目の前に大きな看板の背が映った。765ライブシアターと英語で表記された看板は、日がまだ上っていることもあって電気は点いていない。

ここならば誰も来ることはないだろう、そう思った彼は看板の背に、己の背を向けて縁に座った。今日日風の機嫌は悪いらしく、絶え間なくプロデューサーの全身へと吹き続けている。春の陽気には時折ある事だった、桜の咲いた頃に、まるで花を散らさんとばかりの風は悪童の悪戯のよう。トレードマークとまでは自負してなくとも、セットには力を入れている髪も風の勢いに折れ、すっかり乱れていた。

目を伏せ、手元に開いたノートパソコンのディスプレイを見つめる。たまに邪魔する前髪が鬱陶しく思い、眉を擧めて手櫛で直す。思

えばこの髪型との付き合いも長くなったものだ、と彼は邪魔つ氣に退かしながらも感慨深くなる。

一度は信を失い去った道を逸れ、横道に興味を兼ねた仕事として選んだバーテンダーという職業に相応しい髪型としてオールバックなどど古風なものを選んだが、それも二年もの歳月となれば愛着もつくらしい。毎朝の整髪には時間がかかるし、使う整髪料の金額も馬鹿にならない。合理を良しとする彼なら思い切って短く切ってしまう方がいいのに、どうにも氣が向かなかった。

未練だろうか、いや……恐らくはそれよりも卑しい感情、彼は過去を繰り返したくないが為^レに過去の己の手段に倣^レいつつも身形を変え^レることで同一ではないと言^レい聞かせているのだ。

キーボードを叩く音に従ってディスプレイに埋められていく文字列や数列を映す瞳は、玻璃のように人間らしい感情を映さない。けれど時折、タイプミスする指先は先の見えぬ未来に躊躇いを持っているように見えた。

これは賭けだ。凧いだ湖面に投石して波紋を起こさない、などという無理難題を実現するのと同等の、途轍もなく分の悪い賭け。

しかし、やらぬわけにはいかなかった。始めこそ彼はいまある材料を最大限に駆使しての道のりを考えていた。だが彼は知ってしまった。知らぬままではいられなくなった。

耳を澄ませば何処からともなく聞こえてくる、調子外れの歌声に可能性を懐かすにはいられなかった。

「辛くても♪ 諦めないんで♪ 夢はきつと可奈[†]うんで♪
♪」

「……」

自身の空想の産物なのだと思っていた歌声は思った以上にセンスが無かった、と己を恥じてしまいそうになった所で、本人が居ることに気がついた。

気持ちよさそうに瞼を閉じて歌う彼女は、風に打たれながらも緩やかで独特なテンポを崩さない。

やはり、お世辞にも——元より世辞を言えるような性質ではないが

——上手いとは言えない可奈の歌声。だが、彼女の歌声が彼に一つの決意をさせた。だからだろうか、そこまで邪険に扱う気も起きなかった彼はらしくもなく自分から話しかけていた。

「食事は終わったのか？」

「はれっ!? ぷ、プロデューサーさん居たんですかっ!?」

「俺のが君より先にここに居た」

それは間違いない事実だ。彼がきた時には人影など一つ足りとも無かった。だから、可奈が瞠若して口走った台詞はコツチの台詞だと言いたい。

「そうだったんですか、私、歌に夢中で気がつきませんでした……てへへ」

はにかむ可奈を眺めながら、そういえば彼女のプロフィールの好みの欄に『屋上で歌うこと』と書いてあったのを彼は思いだした。だとすれば気がつかぬ内に彼女のテリトリーへと入ってしまったのは、それを失念していた彼の失態だ。

アイドルたちを避けて人が居ないだろう屋上を訪れたのに、これでは意味を成さなくなってしまう。彼はノートパソコンを静かに閉じ、短く息を吐いて立ち上がった。屋上に吹く風は、座っている時よりも心なしか強くなった気がした。

「邪魔をした、俺は行くからしつかりと体を休めるように」

「あつ、待って下さいプロデューサーさん」

「何だ？」

「私、まだちゃんと言っていないことがあるんです……だから、少しだけ……良いですか？」

伏し目がちに両拳を作っては解く、まるで大気を揉むような仕草をしながら可奈は自信のない声で懇願した。なにが彼女にこのような表情をさせるのだろうか、皆目見当がつかない彼は仕方なしと思いつながら、顎を引いて彼女を見据えた。

「聞こう」

自分は何様のつもりだ、と思いつつも態度を崩さずに彼は言葉を待った。

ためらいがちに下方に向いていた視線が、ゆつくりと持ち上がったいく。彼女もまた、自分を恐れているのだろう——少なくとも現時点で彼はそう思っていた。ダンスレッスンの時に全員の顔を見たとき、目が合った瞬間、多くの者が好意的とは真逆の対応を見せたのだ。そして歳の若い層の多くが、彼を恐れるような対応が多かった。

だから可奈が恐れるのも無理はない。むしろ彼としては好ましい。恐れはいずれ畏れを生む、そうなれば仕事もやりやすい。なのに——矢吹可奈の瞳は一遍の曇りなき、清澄な宝飾品のようなだった。

「ありがとうございます、私、嬉しかったです。あの時、不安だった私の質問を真面目に答えてくれて、本当に嬉しかった……だからありがとうございましたプロデューサーさん！」

彼の瞳が感情の存在に懐疑的にさせる玻璃のようであるなら、彼女の瞳は感情という星々を閉じ込めた玻璃のようであった。

「……それだけか？」

「〴〵だけ〴〵じゃないですよ、私にとってはとってもとっても大きなことですから。そうだ、お礼に歌いましょうか？　ちようど良いフレーズが浮かんできたんで」

「いや、必要ない」

右手を挙げて提案を拒否し、制止する。

プロデューサーの顔には不可解の一言に尽きる表情が象られていた。だってそうだろう、彼は目の前にいる〴〵アイドル〴〵を遠ざけんと、一定の距離を保とうと努めたつもりだった。だのに何なのだ？

彼女の瞳に映る信頼の光は。

「矢吹は、歌が下手だな」

「うっ……やっぱり、プロデューサーさんもそう思いますか」

不可解な信頼がのしかかり、ふと無骨な物言いが出てしまった。

彼女も自分自身で自覚していたのか、痛い所を突かれた様子で肩を丸めた。

もう少し別の言い方や話題があった筈だ——彼は悄然とする可奈を、苦い面持ちで見つめながら内心で謝罪した。一度口から放たれた以上、即座に撤回、というわけにもいかない。本意ではないと思いな

がらも、ここで話を切つては良くない沈黙が時間を無駄に喰らうと判じ、彼女の歌唱力に対する所感を並べ立てる。

「感情を乗せるのは構わない、しかしそれ一辺倒ではバランスが崩れる。テンポと音程、声量の強弱と呼吸のタイミング、なにより大切なのはその歌が何を “伝えたい” のかを理解する事だ」

「ええっと……テンポと、音程と強弱をタイミングよく伝えて、あと呼吸を……。ううん、もつと頑張らないとっ！」

見た目や態度から打たれ弱いかと思われたが、存外そうでもないらしい。アドバイスのようで “君はこんなにも駄目な所がある” なんて厭味にも取られてもおかしくない助言に、可奈は貪欲に学ぶ姿勢を見せた。

「では俺は先に戻っている」

「あ、はいっ」

これ以上の対話は不要と判じ、彼は屋上を後にする——その間際、練習は構わないが、あまり熱中して午後の時間に遅れないように。それと、春とはいえまだ風は冷たい。汗は拭いておいた方がいい」

振り返り忠告をする。

風をひかれては今後のスケジュールに支障が出る。彼としても彼女らに試練を課しはすれど、無意味なシゴキを押し付けるつもりはない。

「うあつ、忘れてました気をつけます」

汗の存在など意識のそとにあつたらしく、指摘されて初めて可奈は慌てて首にかけたタオルで拭っていく。

まるで小動物のような彼女の仕草を横目に、プロデューサーは屋上から立ち去った。

一時間の昼休憩を終え、プロデューサーを含めシアター組全員のアイドルは再び談話室へと集合していた。各々が十分な休息を得られたのか、午前のダンスレッスンで消費した体力はある程度回復した様子だ。

プロデューサーはアイドルが全員揃っているかを確認するように

側目し、それを終えると区切りをつける意味で一つ頷いた。

「朝に説明した通り、午後からはボーカルレッスンとビジュアルレッズンをやっていく。これから呼ばれる七人は俺と共にレッスンスタジオに、残りの者は劇場ホールにて各自ビジュアルレッズンを行ってくれ」

「はいっ！」

ハイトーンの黄色い返事。これまで永く縁遠かった状況に、プロデューサーは心が落ち着かない風情ではあった。が、彼はそれをおくびにも出さずにホワイトボードへと振り向いた。

午後の予定に書かれているボーカルレッスンという字に、特に意図も無く丸を付ける。ただ単に、一拍置くタイミングを欲しただけだ。コツコツとホワイトボードを水性ペンで叩きながら振り返る。彼の口が開くのを待っているのだろうか、アイドルたちは黙然と張り詰めた面持ちで立ち尽くしていた。

「今日は七人一組のボーカルレッズンを二組分やる。つまり、計十四人がレッズンを受けるという事になる。初めに呼ばれる七人以外にも、後に呼ばれる可能性もある。よって各々、いつ呼ばれても大丈夫なように準備だけはしておくように」

淡々と言い切って、プロデューサーは胸元から手帳を取り出した。それは赤羽根がシアター組のプロデュースをする際に持っていた物、彼の苦労と努力が染みついた物だ。今後はプロデューサーがシアター組を担当する事になったので引き継いだそれは、端がよれて色も褪せていた。それでも、買い換えるつもりにはならなかった。

手帳を開き、最新のページへ目を通す。

固い文章で記された名前を、これまた固い声色で読み上げる。

「春日未来、伊吹翼、最上静香、北沢志保……矢吹可奈、七尾百合子、望月杏奈。以上七名はこれよりレッズンスタジオに集合。」

他の者は劇場ホールへと向かってくれ。以上だ」

「はいっ」

名前を呼ばれた七人は自然と引き合うように集まった。

何故呼ばれたのか、理解出来ないという戸惑いと純粋な疑問、また

レッスンに対しての意気込みからか毅然としている者など、その特有の「豊かさ」は彼女たちが中学生だからだろうか。不意に己の中学時代に彼女たちのような女子生徒はいただろうか、と記憶を振り返ってみるが、途端にその無意味さに気がついて自重した。

「早く行きましょう、時間がもったいないわ」

このまま放っておけば雑談が始まってしまうのでは、と危惧して彼が声をかけようとしたのを先んじて、静香の凜と澄んだ声が諫めた。この七人に限定した場合、集団を牽引するのは彼女か、志保だろうと読んでいた彼の考えは間違いでなかつたらしく、他のアイドルたちは忠言を受けて足早にレッスンスタジオへと向かった。

その背中を追うようにプロデューサーが声をかける。

「スタジオについたら各自発声練習をしておくように、これより十分後に始めるので、それに間に合わせるように」

「まっかせて下さい！・じゃあお先に行つてきます！」

手を上げて元気よく答える未来は、振り返りながら歩いていさせいか、その後自分の足に引っかけたり転びそうになっていた。無邪気さと明るさ、それに積極性を数値にするならば未来という少女はこのグループ内ではトップクラスだろう。

ただ彼としては、そんな未来に疑義を懐いていた。

まるで他の者の行動を封ずるような、そんな先回りに似た行動のように見えた。

気になるのは事実だが、これに拘泥して十分という少ない時を無駄にはしたくなかつた彼は、一息吐いて劇場ホールへと向かった。

アイドルたちとの初対面の時以来になるホールは、七人欠けた状態である日の焼回しのような光景が広がっていた。

一歩一歩確かな足運びでステージへと近づいて行くにつれ、ステージに立つ少女たちに緊張の色が滲み出てくるのが見て取れる。ただ一人——馬場このみを除いて。

緊張感を持つことは大切だ。緊張感は警戒を意識させ、警戒は失敗を遠ざける。ただし、それも度合いによって変わってくる。根拠のない緊張は足早に肥大化していくもので、根拠が無い故に解消も出来ない

い。だから彼は自信に緊張を向けさせることにした。そうすれば彼女たちの感情制御も楽に行える、という手軽さから。

「気にせず始めてくれ」

「そんな睨むような目で言われて、気にするなって方が無理よ」

なのに馬場このみは彼に対して緊張感も嫌悪感も懐いているようには見えなかった。自惚れではなく、本当に、疑いの眼を以って見続けた彼をしてそう結論付けるしかなかった。

遠ざけた筈のこのみは、彼を視界に入れるなり何故だか困った子供を慈しむような視線を——子供のような外見をしている癖に——向けて、こちらへと歩み寄ってくる。それが彼の中でさらに疑念を育てる。

ステージ上に立つこのみとプロデューサーの視線が交わる。自然と彼女が見下ろし、彼が見上げる形となる。

「客の視線は下手な批評家より辛辣だ。この程度受け流せないようでは今後に響く」

「でも毎日そんなんじや息も詰まるわよ？ プロデューサーもちよつとは気を緩めたらどうかしら」

「気を張っているつもりはない、俺はいつもこんなだ」

大袈裟にぎつくばらんに答え、プロデューサーはこのみの心意を探る。

どうにも彼女だけは、彼の描く指針通りに動いてくれない印象があった。先日の談話室での会話では突き放した筈なのに、未だ彼女は自身に嫌悪も畏怖も懐いていない。せめて苦手意識程度は期待できるかとも思っていたが、これもいまの態度を見る限り望みは薄いだらう。

このみの後方に控える他のアイドルたちも、彼女のくだけた態度にプロデューサーという人物の再評価を始めようと二人のやり取りを観察する眼を向けていた。

やりづらい——彼にとってあまり望ましい状況とは言い難かった。思わずため息が出てしまうぐらいに。

「……準備運動が終わり次第、レッスンを始める。二時間後にまた来

る」

「私たちの練習は見てかないの？」

「今日はボーカルレッスンに講師を呼んでいない。あの七人を見なくてはならないので、年長者の君に任せる。得意だろう、年下の面倒を見るのは」

「ま〜ね、なんてったってお姉さんですからね。若い子の手綱は私に任せないっ」

「なら、そうさせてもらおう」

ふふん、と鼻高々にやにさがるこのみから視線を外し、遠巻きに二人を見ていた者達へと移す。いつもは眠たげなのか睨んでいるのか判別がつかない眼差しが、今に限っては睨みの方へと天秤が傾いていた。

数人がびくりと身体を震わせるが、気にした様子もなく彼は口を開く。

「ここでのレッスンは馬場に一任する。特別な方法は必要ない、いつも通りの事をいつも通り続けるように」

このみとの会話にて失いそうになった印象を取り戻すように厳然と言い放ち、返事も待たずに踵を返した。背後から子供のような体躯と容貌の彼女がレッスンの続きを促す声がし、それに従うような声が返ってくる。

あまり彼女との会話は控えた方が良いかもしれない——プロデューサーは劇場の扉を潜り、後ろ手に閉めながら頭を悩ませた。

一口にボーカルレッスンと言っても、単純に歌い続ける、というわけでもない。

勿論、歌いはする。講師による音程やリズムテンポ、強弱等々、やることは多岐に渡る。その中でも重要視されるのは、曲の解釈である、とプロデューサーは考える。

「矢吹、もう少しこのフレーズは感情を抑えて、溜めるようなイメージで」

「溜める、溜めるんですね、はいっ」

「それじゃあもう一度、一小節前から」

この曲は何を思つて歌うのか、歌詞のみに記されたそれは音も旋律もないただの美しき文字列でしかない。平面的な美を体现する詞は一人人を豊かにさせる太古より伝わり続ける遺産だ。が、現代人はこれに音と旋律を乗せ、三次元的跳躍を果たし人心に様々な影響を与える。だからこそ、何を思つて歌い伝えるのか、これがとても重要なのだ。

集中している可奈から視線を外しキーボードを叩く。ノートパソコンに繋いだスピーカーから、楽曲がBメロから流れ始める。当然、これも765プロの全体曲だ。シアター組専用の全体曲を持たない彼女たちの練習には、これを使用するしか他にない。ソロ曲こそあれど、それは彼女ら個々が持ち、一人で歌う物。であるならレッスンにソロ曲を使用した所で、曲事態を知っていても完璧に歌うことが出来ない、という噛み合わせの悪い結果にしなければならない。

その上、全員が誰かのソロ曲で練習をして例え上達した所で、基本的にその曲を他のアイドルが歌う、などという変則的展開になどならないのだ。不測の事態が起きるなどしてやむを得ず、という線が必ずしも無いと言い切れるわけじゃないが、だとしても不測を予測して地道に運以外のあらゆるモノを埋めていくのがプロデューサーの仕事だ。

だから、

「望月、レッスンもアイドルの仕事だ、スイッチを切り替えろ」

「……………ん、わかっ……………りました」

「七尾、君の想像力の逞しきは理解した……………が、この曲にファンタジーの要素は無い。あくまで現実に則しているのを忘れないように」

「え？ ど、どうしてバレ……………」

「一区切りの度に妄想を口にするのは控えた方が良く、沈黙は金なりとまでは言うまいが、この場合君の妄言は金言には成り得ない」

こうしてアイドルたちの手綱を握り、制御するのも必要とあればいくらでもしよう。これで彼女たちが成長してくれるのなら、彼は労力を惜しまない。

「北沢、最上、これはソロではない。全体に合わせバランスを取ることを忘れるな。曲が死ぬ。」

伊吹、練習と割り切るな本番を想像しろ。目標の無い努力は時間の無駄だ。

春日……歌詞を間違えている、読めない漢字には振り仮名を忘れるな」

かと思えば問題は次々と浮かび上がる。塵ちりを集めて積み上げる度に風が吹いては吹き飛ばし、再び積み上げるような、そんな徒労を予感してしまうのは気のせいだろうか。

問題は多く、課題は山積みだ。さらに自分で設けたとはいえタイムリミット付き。

だがそれでもやるべきだと感じた。

僅か二時間のレッススが終わり、彼女たちを連れて劇場ステージへと向かう。道中、可奈が何やら彼に質問したそうにそわそわしていたが、気がつかないフリで黙殺した。未だ、他の六人は彼に距離を作って遠巻きに見ているだけだった。

彼女たち七人と入れ替わる様に、次に選んだのは、大神環、ジユリア、所恵美、高坂海美、宮尾美也、田中琴葉、島原エレナの七人。

彼女たちもまた問題点は多く在ったが、それ自体は構わない。彼としては問題があるのを知ったからこのような事をしているのだ。だから疲労は積み重なるだろうが、構わなかった。だが別の問題も浮上した。

この七人の中で唯一の年少組である環がプロデューサーを、恐れか嫌悪か——年少ゆえにその機微も解り難く——理解出来ぬが苦手としている為に、思った以上にレッスンに支障が出てしまった。

これは彼にとっても初めての経験であった。意図して畏れを得ようと振る舞っていたこれまでの行動や言動が、年少には思った以上の効果を発揮してしまうなど想定していなかった。パラシユートで目標地点に着地する瞬間に、強風に吹かれたような気分だ。

『プロデューサーの言い方……他の子には誤解されるから気をつけた方が良いわよ。私は年長者だから良いけど、ここにはお子ちゃまもい

るんだから』

先日このみと交わした会話が脳裏を過ぎった。

彼女が言っていたのはこの事だと、遅まきながら結果が出てから理解したプロデューサーは年少組に対しての接し方を考え直すかどうかを、考えるしかなかった。

こうして初日のレッスンスケジュールは、彼女らと彼に多くの問題を点を浮彫にさせたまま、改善点を明日に持ち越して終了した。

※

空模様は既に夕暮れを通り越していた。

劇場に殆ど籠りきりだった彼女たちは、夕暮れを見ぬままに夜と出会ってしまった事に、時間の流れる速さをほとんど実感せざるを得なかった。もし昼休憩中に外の空気を吸いに行ったりしていなければ、きつともっと早く感じていただろう。

プロデューサー直々のレッスンが終わり、アイドル一同はとりあえずの所いつもの習慣ゆえか、談話室へと集まっていた。みんなの表情はお世辞にも「やりきった」というポジティブな汗を流した後の爽快感とは縁遠い。というのも原因は、やはりプロデューサーにあった。

『明日は日曜日、日程は本日と変わらないのでその旨忘れないように。何か用事、または緊急の事が起こった時は事務所に連絡を入れてくれ。以上だ』

たったそれだけの通告を終えて、彼は仕事鞆を持って劇場を後にした。恐らくは事務所に戻っているのだろう。正直な所、彼が談話室に居残っていたら彼女たちはここに寄りつかなかっただろう。

逆に彼が居ないからこそ、この場にアイドル全員が集まるという珍しい状況になっていた。

計らずとも彼が要因となって彼女たちの結束は強まっていた。

「杏奈のヒットポイント、もう黄色……。なにか、食べたい……。な」

「私も……レストランが舞台の本読んでたら、お腹が。なんだか、いつ

もより疲れたような気がする……」

「百合子さん、も？ 杏奈、ブロックなら持つてる、けど……食べる？」
「えっ、本当？ あ、でもそれって杏奈ちゃんが食べようと取っておいた物だよ。貰うわけにはいかないよ、杏奈ちゃんが食べて。お腹、空いてるんでしょ？」

杏奈がもそもそと実寸よりも大きい服の袖を引つ込め、どこからか取り出したバランス栄養食を、百合子は彼女の空腹具合を鑑みて辞退した。自分とて空腹を覚えているが、差し出されたブロックは元を正せば杏奈の物だ。彼女が食べるのが筋であろう。

でも、当の杏奈はバランス栄養食の封を開けるなり、中に入った二本のブロックの内の一本を百合子に差し出した。

「じゃあ、一緒に……、食べよう？」

「杏奈ちゃん……！ うんっ、ありがとう！」

同じ食事を分け合い、二人は肩を並べて口に運ぶ。それは簡素で、食べた瞬間から水分を欲してしまうような、けれど不思議と癖になる、そんな食べ物だった。

体力の消耗はこの二人に限った話ではなかった。

談話室の中央でぐったりしている未来は、満身創痍を絵にかいたような表情になっていた。

「うあゝ、つーかーれーたー」

「情けない声出さないでよ、未来。聞いてるこっちまで感染うつりそうだしわ」

両腕をテーブルに目一杯伸ばし、体を預けながらに呻おんき声を上げる未来に、溜息一つ吐いて静香が諫めた。そんな彼女の音声おんじょうにも疲労が隠しきれていなかった。

「う、だつて、なんか今日はいつもよりも疲れちゃったんだもん。何でだろう？ ねえ静香ちゃん、何でだと思っ？」

「あなたが解らないものを、どうして私が解ると思っの？」

「えへへ、静香ちゃんならわかるかと思っ」

疲れた、と言いつつも無邪気な笑みを絶やささない。静香は未来のこ
ういった所は素直に評価出来ると思っっていた。

——それだけに今日一日の彼女の様子が気になってもいた。

「ねえ未来、あなたなんだか今日は様子がおかしかったけど、何かあったの？」

気遣うような問いかけは彼女特有の静謐な声色と相まって、耳にするだけで心身を慰撫する。

なのに、未来の表情は罰が悪くなったように曇る。言葉を選ぶように幾度も口の形が変わりながら、視線が視界に映る仲間達へと右往左往する。それは明らかな動揺であった。

「あー、えつと、ね」

「あまり言いたくないことなら無理に言うことないわよ、私も無理に訊くつもりはないわ」

「そうじゃないの、ただね……プロデューサーさんの事で、ちよつと気になつて……」

「プロデューサー……」

単語一つに静香の表情にも陰りが差す。

結局、今日一日のレッスンは特別何かを成し遂げたと言うわけもなく、新しい試みを導入したわけでもない。良くも悪くも普通、というのが静香の総評だった。

ただ、未来が言いたいのはそう言う意味での「プロデューサー」ではないのだろう。

あのね——と言いながら未来は鷹揚に身を起こした。

「始めは嬉しかったんだ、私たちにも専用？　じゃなくて、専門つてのも変だよ。うーん、なんて言えばいいのかね」

「専任、つて言いたいんですよ」

「それぞれ専任！　よくわからないけど、そんな感じでプロデューサーさんが来てくれたのは、私……すつごく嬉しかった。憧れのアイドルにまた一步近づいたような、そんな気がして」

春日未来という少女はアイドルを志す前は、当然ながら普通の女の子だった。多くの部活を掛け持ちしながら、日々を明るくまっすぐに過ごしていた。だからアイドルという偶像への強い憧れを懐いた時、それまでの日常よりも魅力的に見えたが故に、これまでの全てを擲つ

てこの世界へと足を踏み入れた。

後悔は無かった。後に悔やむと書いて読む後悔は、未来にとってはまだ“先”にあるのだから。後悔するにはまだ早すぎる。

未だにアイドルとしては三流以下、そのスタートラインにようやく立ったと思っていた矢先、社長が彼を連れてきた。丁寧に櫛で後ろに撫でつけた黒い髪、自分より少し高い、けれど決して高身長とは言えぬ身長、その高さから見下ろす双眸。

「初めて会った時は、ちよつと恐い人なのかなって思ってたんだ。急に、ライブはやらない！ お前たちは未熟だ！ 言う事を聞け！ つて怖い顔で言うから。びっくりしちゃった」

「驚かない方がおかしいわ、あんなの」

いま思い出しても腹に据えかねる思いが静香にはあった。それは今日に至って更に膨れ上がっていた。

「あれだけ大言創語しておきながら、結局は普通のレッスンでしかなかった」

「でも、私たちだけじゃ気がつかなかった所とか、沢山注意してくれたよ？ 私なんかいつぱい怒られちゃった、でへへ」

「笑いながら言うことじゃないでしょうに」

嘆息し瞳を閉じる。網膜には未だ数時間前の光景が鮮明に焼き付いている。

確かに未来の言うとおり、彼の指摘は的確であった。これまでもレッスンの講師に色々と教えを受けていたが、それを上回って、彼は別の視点からの意見を遠慮のない口調で切り刻んでいた。性格には難しくないような人物だが、それだけではないのかもしれない。

ただそれでも、今後も彼の教えを受け続けてトップアイドルを目指すのか？ と問われたら、静香は確信を持って頷ける自身が無かった。何かを掴んだ、という実感が今日のレッスンには無かったのだ。「このまま続けて、本当に上へへ行けるのかしら」

煩悶を続ける脳内から溢れ出た懐疑の念が静香の口から漏れ出た。

——と、視線を感じて振り向けば、未来が意外そうな面持ちで両目を見開いていた。

「自信ないの？ 静香ちゃんは」

「そうじゃないわ、ただ今のプロデューサーの教えに疑問があるだけよ」

以前までシアター組にしていた律子と赤羽根に比べて、彼は問題が在り過ぎる。相手を屈服させるような語調に、あの半眼、石の様に硬い表情。とても自分の担当アイドルに向けるようなものではない。いったい社長は何を考えて彼を雇ったのか、静香には理解出来なかった。

それは他のアイドルにも当てはまるだろう。同様の感情を殆どのアイドルが、少なからず懐いていた疑問であり、疑念だった。目の前で呆けた顔をしている未来だって、それは同じだろう。

なのに、未来は先行きにまったく不安を懐いていないような笑顔を魅せる。

「大丈夫だよ！ だってプロデューサーさんが言ってたじゃん『高みから見える景色を観せよう』って」

思い起こされるのは初日のステージでの宣言。

あそこから始まってまだ一日しか経っていない。なのにそれ以上に長い時間が経ったような気がするのは気のせいだろうか。

未来は疑ってなかった、プロデューサーの言葉を。

「でも、さつきはプロデューサーの事を恐い人って言ってたじゃない」「今でもちよっと怖いよ、でもなんか思うんだ。プロデューサーさんが怖い顔して怖い事言うのは、私たちの為なんじゃないのかなくって。」

勝手な思い込みかもしれないし、勘違いなのかもしれないけど、そんな感じがしたんだ。でも百合子ちゃんとか杏奈ちゃんは、怖がってるっぽいし、だから私が間に立てないかなって……えへへ、そんなこと考えてたから、静香ちゃんにもおかしいって言われるんだね」

並べ立てた意見は全て勘でしかない。それも「くかもしれない」

「くだったら嬉しい」という願望が混じってないと言えば嘘になる、そんな頼りない理論だった。けれど、それでも未来にはどうしても彼がただの怖い人、悪い人には思えなかった。

それに、全部が想像と言うわけでもない。現に彼と平気な風情で話している人物が、未来が見て知る限り二人いた。我らがシアター組の最年長にして自称セクシーの馬場このみと、ポジティブが空回りしながらも一週回って戻ってくる矢吹可奈の二人だ。

このみは馴れ馴れしい態度と口調で彼に話しかけていたし、それを咎める様子もなく、寧ろ彼の方が対応に困っているようにも見えた。

可奈は積極的、というわけではないがそれでも彼に少なからず好意的だ。ボーカルレッスンの時も自分と同じか、それ以上に多くの注意を受けてもへこたれず、努力で乗り切っていた。

このように、少なくともこの二人は未来が知らぬ彼の側面を彼女らなりに見出しているのだろう。だから未来も率先して彼に返事をするし、彼を恐れる人の誤解を解いてみようかと奮闘してみた。結果として、それが静香に入らぬ心配を与えてしまったのだから締りが悪い。「さつきから何話してんの？ 二人とも」

シリアスさを自分色に塗りつぶすような魅力ある少女——翼が二人の間に文字通り顔を突っ込んだ。

「なんかプロデューサーの名前が聞こえたけど、どうかしたの？」

「別に大した話ではないわ、どんな人なのかを話題にしていただけよ」

「翼ちゃんはどう思う？ プロデューサーさんの事」

差し向けられた未来の質問に、翼は自分の顎に白魚のような指を当て、考えるような仕草をする。

「プロデューサーさんの事？ そうだなー、うーんまだよくわかんないけど、ずつとつまんなそうな顔してるよね。見てるところつままで屈になってくるから、それはヤだなって思うよ。」

あと、やっぱりちよつと怖い感じがするな〜」

「つまんなそうな顔かあ」

「面白くなきゃ、なんだってつままないでしょ？」

爛漫な笑顔で断言する翼に、未来はこっくりと頷いた。

伊吹翼にとってプロデューサーの態度や表情は、怖くもあるが、それ以上に退屈そうに見えるらしい。独特な意見であるが、それも彼女から見た彼の側面なのだろう。

不意に静香と翼から視線を外す。談話室には未だに多くのアイドルが残っている。ただ一人、二階堂千鶴はそそくさと何やら周囲を気にしながら出て行ったが、偶に見かける光景だったので未来は気にしなかった。

運動が元から得意なエレナや歩、そして海美や奈緒などは平気そうな顔で談笑しているが、逆に体力に自信の無い者達の表情は未だ優れない。

「あの、志保ちゃん……今日のダンスレッスンの時、ぶつかって邪魔しちゃってごめんね」

「気にしないでいいわ……気がつかなかった私も悪かったもの」

固い口調でぶつきらぼうに返す志保に、可奈は何かを感じ取ったのか、眩しく輝くような笑顔で彼女に向かって飛びついた。

「ありがとう志保ちゃんっ！」

「きゃっ、ちよ、ちよっつと！ 矢吹さん……っ！ 突然抱き着かないで」

微笑ましいひと時の向こう側には、沈んだ様子の環を恵美が慰めている様子も見られた。子供だけあって、直接的なプロデューサーの言動にはそのまま直撃だったらしい。が、恵美が慰め、それに海美が混じると、これまた子供らしく環はすぐに持ち直して——こんな時間なのにも拘らず——遊ぼうと二人にせがみ始めた。

何も進歩していないのかもしれない、そう思う静香もいれば、マイペースに退屈なのは嫌だと主張する翼もいる。

改めて自分はどうかのだろうか——未来は己の内に問いかける。

以外にも、答えはあっさりと返って来た。

これからどうなるのか、楽しみでしようがない。湧き出た答えに疑念は無い。これが未来が出した偽らざる答えなのだ。

※

765プロ本社事務所には数人のアイドルがまだ残っていた。空が群青に染まりつつある時間帯とはいえ、アイドルという職業柄おか

しくもないだろうとプロデューサーは不思議にも思わなかった。残っているアイドルは、双子の姉妹である双海亜美と真美、沖繩出身の我那覇響、ミスティアスが服を着ている四条貴音の四人。

相変わらず立てつけの古くなつた事務所の扉を潜り迎えたのは、事務員の小鳥だった。

「おかえりなさいプロデューサーさん」

「ただいま戻りました」

年相応の穏やかな笑顔でプロデューサーを迎えた小鳥は、そのまま給湯室へと向かつて行つた。

間仕切りしてある安物のパーテーションの向こうから、前述した四人が顔を覗かせた。自分を観察するペットのハムスターを合わせた十の瞳に気がつき、顔を向ける。

「……！」

まさか気がつかれるとは思わなかつたのか、彼女たちは視線が合うなり瞬時に顔を引つ込めた。貴音だけが遅れて、後ろから引つ張られるように姿を隠す。

プロデューサーは気にした様子もなく、自分のデスクに着いた。

一度だけ背筋を伸ばすように身じろぎし、肩を回す。この二日間で急に増えたデスクワークは想像を越えて彼に負担を与えていたらしい。無理も無いだろう、この仕事をしていたのは二年も前の話。そのブランクは大きく、過去に担当していたアイドルはたった一人だったのだから。

開いたノートパソコンにまだ残っているレッズンスケジュールの項目を作っていく。暫くタイピングの音だけが事務所内に響き渡る。パーテーションの向こうに居る彼女たちも、息を潜めて会話しているのか、ここからじゃ彼にも内容は聞き取れない。

ことり、と音がした。特に意味もない環境音だと思い、プロデューサーは無視していた。が、やがて無視出来ぬ「香り」が彼の鼻孔へと漂ってきた。

手の離せない作業の中、横目で盗み見ればそこには湯気が上つた淹れたての珈琲が置いてあつた。

事務作業から離れて視線を向ければ、そこに人影は見当たらない。はて……だとしたら一体誰がこの珈琲を淹れたのだろうか。仕事に集中するあまり彼はソレに意識を向けられなかった。

先程給湯室へと向かった小鳥の差し入れだろうか。しかし彼女ならば姿を隠すような演出を興じず、ごく普通に、当たり前前に寄り添うように微笑みを携えてマグカップを差し出すだろう。

この時、満足に睡眠を取らずに激務に励み、あまつさえなれない生リズムに喝を入れながら肉体を酷使していた彼は、有り体に言って疲れていた。だからだろう……彼は特に誰何するまでもなく目の前の珈琲を疑いなく口へと運んでいた。

「……………むっ」

それは呻きであつた。

ゆつくりと巻き戻す様にその手からマグカップが元の位置へと戻された。

眉を顰め、目を眇め、眉間に皺が寄る『程度』で済んだのはひとえに彼の精神力の強さにあつた。

「いえーい、やりやりー！ 大成功〜！」

一音違わず重なり合う勝利宣言にも等しい歓声がステレオで湧き上がった。

声を聴いて、初めて自分がハメられたことに思い至つた。冷静であれば、或いは気がつけたかもしれない——立ち上る湯気から漂う珈琲『以外』の香りに。

「んっふっふっ、やりましたな真美隊員」

「んっふっふっ、やりましたぞ亜美隊員」

締まりがない表情で現れたのは、瓜二つの少女だった。あえて違いを探すとするなら髪型と服装の色ぐらいだろう。見紛う事無く、二人は双子である。

猫のような口元に手を当て、半眼でプロデューサーを見つめて朗笑する二人へと、彼は苦々しい面持ちを凍てつかせて口を開いた。

「双海亜美、双海真美」

「やばっ、この顔は怒ってる顔ですぞ」

「こんな時は逃げるが勝——」

「待て」

身を翻して逃走を図った亜美を制止するは氷の言霊。低く、熱のない声が彼女たちの足元に霜を張り、足を凍りつかせた。

褪めた双眸が鏡合わせの少女を見据える。

視線に気がついた瓜二つの二人は、しかしこの場において対極の反応を見せた。

「うあうあー、めっちゃ怒ってんじゃん。亜美がやろうなんて言うからだよー」

「真美だってノリノリだったじゃんか。亜美はオトナのじょーしきには屈しないんだかんねっ」

怒られると思ったのか、肩を窄めて萎縮する真美。

怒られまいと抗ったのは、胸を張って豪語する亜美。

芸能界を生きるアイドルとはいえ、彼女たちはまだ子供、中学生だ。遊びたい年頃に我慢するなどというのは酷なものだろう。それにきつと、これが彼女たちなりのコミュニケーション方法なのだろう。プロフィールにも『悪戯好き』と書いてあった。

真逆の行動の中に混じる同一の眼差し、プロデューサーを恐れる瞳を前にして、彼は嘆息し、肩の力を抜いた。

「すまないが新しい珈琲を淹れてくれないか。ああ、もうタバスコは入れないように。珈琲には合わない。

生憎、刺激物を混ぜて飲む趣味は、俺には無い。どうせ入れるなら砂糖にしてくれ」

「……………ほうほう、さてはイケる口だねっ、新人クンは」

「真美たちの“つーかギレイ”に屈しないとは、さては同じ穴のムジカだね！」

本気で怒らない、という事は安全な人。なんて方程式が彼女たちの価値観に組み込まれているらしく、二人は一転して破顔してみせた。

ムジカ、とはイタリア語だろうか、などとプロデューサーの脳裏に持ち上がった疑問は、続く無邪気な声を前に霧散した。

「ではでは真美隊員、新たな任務の為にピヨちゃんのとこへと——」

しゅっぱあ〜っ！」

「あつ、待つてよ亜美ー！」

小鳥も共犯者であった事を口に漏らしながらも、上機嫌で給湯室へと走っていった二人。狭い事務所では距離などあつてないようなもので、あつという間に二人の姿は給湯室へと消えて行つた。

ものの数分で嵐でも過ぎ去つたような静けさが舞い戻り、彼は口内に残つたタバスコの残滓を吐き出すように大きな息を吐き出した。

仕事をしよう——そう思つてパソコンへと向き直れば、スリープ状態になり暗転したディスプレイが、彼と、その背後に立つ姿を映し出していた。鮮明とは言えない出来損ないの鏡であるが、それでもこの特徴的なシルエツトには覚えがあつた。

「用件はなんだ？ ……四条」

「なんと面妖な、新しきプロデューサーは背中に目があるのですか？」
「ディスプレイに映っている」

なるほど得心しました、と言つて貴音は感心したように目を瞠つた。

彼女には独特の会話のテンポがある。短いやり取りの中でも、それをはつきりと解るほどの難解さだ。意味不明な言い回しではあるが、これ以上に彼女を言い表す言葉がプロデューサーには思いつかなかつた。

「それで、用があるのだろうか？」

こちらが黙っていたら相手も同じように沈黙を続けそうな雰囲気を感じ、プロデューサーが振り向いて問う。

玲瓏たる月を思い起こさせる銀髪の王女が、真剣な眼差しで彼を凝視する。

「らあめんにたばすこは合うのでしょうか？」

「……………さて、種類によるのではないか」

「それは……………らあめんのでしょうか？」

「そうだ。気になるなら自分で試してみると良い、体験に勝る経験はない」

「……………箴言ですね。良いことを訊けました。真、感謝に堪えません」

絶句しなかったのは流石、と己を褒めたい気分だった。

珈琲にタバスコを混入する悪戯はまだ——許容するわけではないが——理解出来る。しかし、その流れに乗って何故ラーメンなのか。そしてタバスコと合うのか、などという奇天烈な質問になるのだ。跳躍した思考プロセスを前に、問い質そうなんて疑問すら湧かなかった。

「では早速試してみましよう」

「……好きにしろ」

「ちよ、ちよつと待つんだ貴音！ 早まつちや駄目だぞ！」

快く前向きな返事をした貴音を制止する声と共に、もう一人、日焼けが映える少女が慌てた様子で横槍を入れてきた。

「辛い物と熱い物を一緒に食べたら、口の中が大変なことになるぞ」
「ですが、プロデューサーの仰る通り、己が身で体験する以上の経験があるとは思えません」

貴音の身を案じて引き止めるも一步も譲らぬ姿勢を見せる彼女に、我那覇響は縋るような眼差しをプロデューサーへと向けてきた。困ったような表情がやけに似合っていた。

「プロデューサーも見てないで一緒に止めるんだぞ」

成程、熱い物に刺激物を合わせて食べればその刺激は倍以上に増すだろう。然る後に彼女はその辛さに悶絶するかもしれない。それを案じての行動。

「随分とまともな思考だ」

協力を求める響の様子を見てプロデューサーは彼女をそう評した。

「君は普通だな」

「なっ!? どうして突然自分を貶すんだ、酷いぞ！」

思ったままを語った途端、響は八重歯を見せて抗議の声を上げた。なぜ怒ったのか彼には疑問だった。が、考えてみればアイドルを前にして「普通」という評価は褒められてると思えないのも無理はない。

そう、響も貴音も亜美も真美も「アイドル」なのだ。故に彼の行動や発言に間違いはないだろう。アイドルから一貫して距離を置く事

を決めたのだから。

これを気に“苦手”もしくは“嫌い”になつてくれれば——シアター組と違つて担当ではないアイドルで、しかも顔を合わせる事など多くはないが、それでもアイドルが彼に向ける信頼はやがて猛毒になる。

だが響は「あつそうか」と何か自分の中で納得がいった様子を見せた。

「プロデューサーは自分のことを知らないからそう思うんだな。じゃあ、改めて自己紹介するぞ。」

はいさーい！ 自分、我那覇響だぞ。自分のことを一言で言うなら“普通”じゃなくて“完璧”って言つて欲しいぞ。なんてたつて、歌もダンスも完璧だからな！

それと自分には家族が沢山居て、ハム蔵の他にも沢山家に居るんだぞ。なつハム蔵……つてあれっ？」

片方の肩を持ち上げてハム蔵を紹介しようとする前に出す、がそこにハム蔵の姿は無かった。

響の顔が青褪める。

「うぎゃー！ ハム蔵がまた居なくなつたぞ！ ハム蔵ー！ どこにいったんだ姿を見せるんだぞ！」

「仕方ありません、手伝いましょう響」

「うう、貴音……ありがとう」

「かんせー！ 究極の一品ができたよー」

「これなら“にい兄ちゃん”も、あまりの美味さにきよーがくして、頬つぺた落つこちちやうかもねー」

これが舞台的一幕ならどれだけ良かっただろうか。怒涛の展開過ぎて、プロデューサーはただただ眉を顰めて閉口するしかなかった。

——が、舞台だとするなら……そんな彼を脚本が逃がしてくれるわけがない。

「おまたー、亜美真美特製コーヒーの出来上がりだよっ」

「いいリアクションを期待してるよちみいー」

二人の手には一つのマグカップ。中に満たされているのは珈琲な

のだろう。しかし、彼女たちの言うような珈琲 “だけ” とも限らない。飲みたくない、というのが本音である。

ここで飲まないという選択を取るのには簡単だ。いつも通りの態度で固辞すれば、二人は引き下がるだろう。ただプロデューサーには一つ気掛かりがあった。それが彼に拒否という手段を執ろうとする判断を鈍らせる。

響の泣き叫ぶような懇願の声がハム蔵を呼ぶ。貴音の何処までも自分を崩さぬ声が遅れて呼ぶ。亜美と真美が期待を隠さず瞳を輝かせて今か今かと待っている。

どこまでも喧しく、姦しい雰囲気だ。事務所に居るよりも、シアターで仕事をした方が捗っただろう。そう思うも既に後の祭り、お囃子は今ここで開催されているのだから。

退場など許されないのである—— “彼女” が止めに入らないという事は、そういう事なのだろう。

プロデューサーは諦めの気持ちで仕方なく珈琲を口に運んだ。その行動が、亜美と真美が見せる瞳の輝きを増加させた。

前職の癖からか、流れ込んだ液体の味を吟味して後悔した。——タバスコの次はソースだった。

「……不味い」

飾り気のない評価が下されたと同時に、双子はハイタッチをして歓声を上げた。

次の開発を、などと不穏なことを離し合いながら給湯室へと悦び勇んで向かって行った。響と貴音はキッチンへとハム蔵搜索の手を広げていた。数十分の出来事なのに、プロデューサーには一人の時間が久方ぶりのように感じられた。

そうして……ようやく小鳥が自分のデスクへと戻ってきた。その両手にはマグカップが二つ。

「ふふっ、気に入られたわね」

「どうやらそのようです——貴女のお陰で」

「うっ……やっぱり、気がついた？」

「寧ろ、気がつかないと思っていましたのですか。こんなあからさまな画

策、よっぽどの鈍感でなければ気がつきません」

発端である亜美と真美の最初の悪戯。そこからして既に——正面のデスクで罰の悪そうな顔をしている——小鳥の企みだったのだ。

そうでなければ遠巻きに観察するだけだった亜美と真美が、急に行動を起こすわけがないし、始めから給湯室に居た小鳥が止めなかったのも説明がつく。なにより……亜美と真美が口走っていたのをこちらには聞いていた。

「君に隠し事は、やっぱり無理そうね」

「そうまでして俺に、アイドルたちとコミュニケーションを取って欲しいんですか？」

「それはそうよ、プロデューサーたる者アイドルとは良好な関係を結んで欲しいもの。それに765プロの良い所は結束の強さにあるとあたしは思ってますから」

「何度も言うようですが、俺にそういった馴れ合いは不要です。寧ろ邪魔でしかない」

音無さんはその意味を知っている筈だ——続く言葉はしかし唐突に、扉が奏でた轟音が遮った。

何事かと視線を向けて見れば、同じように気になって振り向いた小鳥の後頭部の向こうで、乱暴に開かれた扉から轟音と共にだれ込む声を伴い、二人のアイドルが口論しながら入ってきた。

「真があそこで上手くトークを回さないから、私の出番が削られちゃったじゃない!」

「それは伊織の所為だろ! 僕が嫌がる話題を振るから!」

「あーら、真、王子」は随分と女々しい事を言うのね。折角、この伊織ちゃんが発言の場をあげたのに、台無しにしといて言う言葉は言い訳?」

「なんだとツ!?!」

「なによツ!?!」

戦意を剥き出しに睨み合う。その剣幕は今にでも突き合わせた額をぶつけんばかりの勢いだ。

武士の時代であれば剣を抜く姿勢の二人の後から、もう一人のアイ

ドルが怯えながらも間に入ろうと口を開く。

「うう、喧嘩はやめようよお〜」

「雪歩は黙ってて!」

「ひ、酷い!」

噛み合わない二人が同調して、仲裁しようと勇気を振り絞った雪歩を双方から口撃した。

堪らず雪歩は涙を浮かべて悲嘆した。

邪魔者が居なくなったことよって言い争いは再会される、かと思われたが不意に伊織の視線がこちらへと向けられた瞬間、彼女はそれまで真に滾らせていた気炎の矛先を変えた。自身が向ける視線、その直線上にて彼女をつまらない物を見るように一瞥した男へと。

忽ち、伊織の顔が嫌悪に染まった。

唐突な変貌に不審さを懐いた真は、伊織の視線を追いかける。と、真もプロデューサーの存在に気がつき、思わず「あつ」と声が漏れた。

「お疲れ様ですプロデューサー」

「ああ、お疲れ様」

固く無骨な愛想の無い返答。

真の友好的な態度は彼女の实直さの表れだ。例え——先日朝の態度から考えるに——伊織が彼を嫌っていようと、それは真には関係ない。

「だけど——伊織の嫌いようは単なる『嫌い』の範疇に収まっていなかった。」

プロデューサーを見るなり険しい顔つきで押し黙ったままの伊織は、唐突に、脈絡なく、放たれた矢の如く憤然と飛び出した。鏟が向かう先は当然——プロデューサーの許だ。

未来予知に迫る予感がプロデューサーに僅かな時を与えた。咄嗟に、無駄にするまいと卓上に乗っていた腕をデスクの下へと隠した。

この時、咎めるようであり、憐憫にも近い視線を向ける小鳥はその行為を黙って見ているしかなかった。

「よく恥ずかしげもなく顔を見せたわね……卑怯者」

開口一番からけんか腰の伊織はまるで燃え盛る炎のようだ。

感情を燃料とし、轟々と立ち上る火の手は彼女の双眸から炯々たる光を放っている。

余人の介入を良しとしない雰囲気が強制的に事務所内を占拠し、二人を除いた人間は遠巻きに眺めるか、或いは息を潜めて存在を限りなく薄くするしかなかった。

「なにか言ったらどうなの？ それとも、その口は他人を騙す時しか開かないつもり？」

「頼まれたから来た、それだけだ」

あくまで槍の穂先を向けてつつく伊織の態度に、始めから取り合うつもりもないプロデューサーは一貫して平坦な声音で答え、泰然とソース入りの珈琲を口に運んだ。途端に顔をしかめる。

説明不足も甚だしい淡々とした答えに、伊織は憤懣やるかたない思いで肩を震わせた。

「アンタ……！ 私を前にして言うことはそれだけ!? 謝罪の一つもなし、悪びれもなく『頼まれたから来た』なんてお為ごかしで此処に戻ってきて、今度はあの子たちに何をするつもり!?!」

「……………」

伊織が見せる本気の怒声に周りも口を挿めず気圧される中、どこ吹く風と聞き流して仕事を再開するプロデューサー。

「~~~~ッ！」

彼にとって伊織の憤怒は取るに足らない子供の駄々、態度がそう語り、ますます伊織の視野が白熱した。

後はもう全てが有耶無耶だ。

伊織は気がつけば衝動的に体が動いていた。

いつも大切に抱いている兎のぬいぐるみを持つ腕とは逆、つまりは右腕が鞭のようにしなりプロデューサーのデスクに向けて叩きつけられた。衝撃でマグカップが倒れ、床にソース入りの珈琲が零れていく。

目が覚めるような快音が事務所内に響き渡る。誰かが息を呑む。流星に見かねた真が動き出そうとして、プロデューサーがそれを視線で封殺した。

「忘れたなんて言わせないわよ！ アンタが二年前——つ、……」

伊織の中で怒りが冷静さを臙氣にさせ、彼女の口が感情のままに抉じ開けられたが、思い直したようにそれまでの気炎が消火されていく。

火の消えた伊織はそれ以降口を噤んで何も言わない。

言いたくないのだろうと、プロデューサーは二年前を重ね、眼前で悄然とする彼女の内心を推察した。あの頃の思い出は伊織自身の情けない過去の歴史でもある。人前では話したくないのだろう。

他者に弱みを決して見せない伊織の在り方は……昔と何も変わっていない。

己のした事実によろやく気がついたのか、伊織はハツとなって掌を見た。途端に、それまで剣呑だった双眸が弱々しく萎れていった。

「……なにか言ったらどうなの？」

辛うじて絞り出して選んだ末の言葉、という程に懊惱が見え隠れしていた声はとても弱々しく、今にも消えてしまいそうな儚さがあった。

そんな伊織を前にして、プロデューサーは考える。なんと答えるべきかを。

彼女を説得し、納得させるのは簡単だ。確実にそう言いきれる絶対の“切り札”を彼は持っているのだから。しかしこれを使うわけにはいかない。切り札の効果は一度きり、使えば全てが変わってしまう。彼の望まない方向へと。

不和も改善の兆しをみせるやもしれない。小鳥も律子も、社長だつて味方するだろう。時間の経過と共に、小鳥が言うような結束の強い765プロに彼も肩を並べることになるかもしれない。

“——忘れるな。そしたら……また繰り返すかもしれない”

戒めという軛くびきが彼を縛り付ける。

あの失敗が、この怯えを生んだ。

あの後悔が、この警戒を生んだ。

であるなら迷う事はないだろ。己を守るために、何より他でもない彼女たちアイドルを護る為に、自分は進んで毒で在ろうと決めた

のだ。

「文句を言う暇があるなら己を高める事を怠るな。未だ、君の歌唱力と解釈には足りない所がある。」

俺に説教するほどプロ意識が高いのなら、プロたらしんとする努力を怠るな。

あの頃と何も変わっていない。トップアイドルになるのだろうか？
自分の実力だけで。なら行動で結果を示せ、そうすれば俺も君の望むようにしよう……今度こそ」

果たして、挑発的な言葉と眼差しは伊織を再起させる劇薬となった。

突き放した物言いのまま、彼はノートパソコンへと視線を戻す。彼の視界の外へと追い出された伊織は、臍を噛む思いで食いしばった。
「上等じゃないっ、私がトップになったらアンタなんかすぐに首にして、今度こそ私たちの視界に収まらないようにしてやるわ！」

「精々励むといい」

「~~~~ッ！ その減らず口、二度と利けなくしてやるんだから！」
何処までも凧いだ様子を見せつけるプロデューサーに我慢ならず、これ以上同じ部屋に居たくない思いから伊織は踵を返した。周囲の者が、彼女を刺激しないようにと自然に道が開けた。

雪歩がそんな怒りを露わにする伊織を最後まで見ていたのは、彼女の佇んでいた位置と、偶然によるものだろう。

事務所の扉付近で小さくなっていった雪歩に、凄烈な感情によって狭窄した視野になった伊織は気がつかなかった。だからだろう……最後の最後で気を抜いてしまったのは。

雪歩の目には、それは悲しそうであり、同時に辛そうな面持ちに見えた。子供が大好きな人に構って欲しくて駄々をこね、相手にしてくれなかった時の悲愴に似ている。引っ込み思案で自己評価の著しく低い、他人の目を誰より気にする雪歩だからこそ、それがわかった。わかってしまった。

伊織が出て行った事務所は何事も無かったように、とは流石に行かなかった。

誰もが何を口にするべきか、発言を躊躇っていた。けれど、そんな中でも一番最初に行動に移ったのは、やはりと言うべきか菊地真だった。

「言い過ぎじゃありませんかプロデューサー。いくらなんでも伊織が可愛そうです」

事務所に入るまで、入ってから喧嘩を続けていたとは言え、真にとって伊織はやはり同じ事務所の仲間なのだろう。曲がった事を嫌う彼女は、どうしてもこの事態に見て見ぬふりなど出来はしなかった。

「過去に何があったのか僕たちは知りませんが、あの態度は酷過ぎです。どうして向き合って話し合おうとしないんですか？」

「菊地、君の誠実さと実直さは美点だ、だがそれらを口にする前に着替えた方が良い」

「……？ どうしてです？」

「本日の収録で身体でも動かしたのだろうか？ 大量に汗を吸った服のままでは体調を崩す、話しはそれからでも構わないだろう」

ディスプレイから視線を外し、真の全身を一瞥した後、興味が無いとばかりに再びディスプレイと向き合う。

自分がどんな格好をしているのか、プロデューサーの大袈裟に裝飾された言葉を耳にして、真は耐えきれずに赤面した。事務所内でも一番ボーイッシュな外見のアイドルであるが、中身は年相応な女の子。しかも可愛い少女に憧れを強く懐いているのもあり、その羞恥は真を染め上げるには十分だった。

「あつ……ば、僕っ、着替えてきまああす！」

一度自覚してしまえば後は泥沼だ。一分一秒でも早く彼の前から逃走したかった真は、泣き声を上げるようにして更衣室へと飛び出していた。

ようやくまともに仕事が再開できる。プロデューサーは嘆息して、まずは零れた珈琲の掃除から始めないといけないのを思い出し、満足に事が進まない焦燥に重苦しい様子で眉間を揉んだ。

伊織と真を除いたアイドルたちは、雰囲気のアスガを感じ取っ

たのかパーテーションの向こうへと消えて行った。亜美と真美も、流石に伊織のマジ切れを見て悪戯所ではないと思ったのだろう。追加の悪戯が実行されることはなかった。

「少しやり過ぎですよプロデューサーさん、これじゃあアイドルたちのモチベーションにも影響するし、担当じゃないアイドルまで遠ざけるつもり？」

固く尖った小鳥の声がプロデューサーを諫める。

自傷行為のような行動を繰り返し、止めることなく続ける彼を見つめる小鳥の瞳は悲しげだ。

「これしかやり方を知らないんです。他に冴えたやり方を知っていれば、今はありませんでしたよ」

「でもこんなの、どっちも辛いだけよ。救われないわ」

「俺は辛くありませんし、彼女も憎むだけで辛くないでしょう。嫌いな物を遠ざける行為に心を痛める筈がありません。

嫌悪と憎悪が反発心をバネにして向上心を高めます、それだけで彼女たちは上へと行ける」

こんなに簡単な原理で勝ちあがれるんですよ、と当たり前を口にするような語調に小鳥は決して同意出来ない。彼女が夢見て、その一端を目にしたステージは……決してそんな傷だらけになりながら登るような舞台ではなかったのだから。

それを彼だつて知って、同じように志した筈だ。手段こそ違えど、到達すべき夢の地は同じだ。

なのはどうして、ここまで道程が違ってしまふのだろうか。

「それは茨じや濟まない道よ、そんな辛い道を均す為ならにどれだけ自分を犠牲にするの？」

「……音無さん、貴女にとってアイドルとは何ですか？」

「それは、」

「俺には形の無い偶像でしかありません」

答えようとして、けれど遮るように続いたプロデューサーの言によって被せられた。図らずとも梯子を外された小鳥は、彼の持論を聴くしかなかった。

「形が無い物を商品として売る。決して減らない生きた在庫を管理するには、厳粛なまでの徹底が必要だ。

ありもしない物を切り売りする、その難しさと無謀さ、一步違えば詐欺にもなりかねないこの商売。誰かが汚れなくては立ち行きません」

アイドルとは売り物であるということ語る彼。傍目にそれは非道なことを淡々と語る卑劣漢に見られてもおかしくはない。が、小鳥の目には血を吐くように語っているように見えた。

「……不器用過ぎます、君も、伊織ちゃんも」

いつかこの不毛な対立は終わるのだろうか。その為には両者が共に歩み寄って、譲歩しなくてはならない。けどそんな事、今の彼らに出来るだろうか。小鳥は嘆くように息を吐いた。

パーティーションの向こうで、雪歩は耳をそばだてていた。

伊織のあの表情、あれが脳裏にこびり付いて離れない雪歩は、プロデューサーがどんな人であるのか知る必要があると判じた。男の人は怖いし、あの人は更に輪をかけて怖そうだが、初めて会った時の対応を思い出すと、そうだと断ずることも出来ない。

とにかく、気になって聴いてみれば、よくわからない会話をしている。経緯を知らない雪歩には抽象的過ぎて、その核心を見透かす事が出来ない。ただなんとなく、やつぱり新しく来たプロデューサーの事は——悪い人だと思えなかった。